

2023年5月1日

みずほディーラーズアイ (2023年5月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 132.00 ~ 138.00

市場営業部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

■ 先月の為替相場

先月のドル円は底堅く推移。月初、133.34円でオープンしたドル円は、米3月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ると132円台前半に反落。翌日に発表された米経済指標も軟調な結果となると、米金利低下とともに131円台後半まで下落。5日も米3月ISM非製造業景気指数が弱い結果となり、米金利は下げ幅を拡げ月安値130.64円をつけた。その後131円台後半に値を戻し、7日、米3月雇用統計の無難な結果を受け、米景気への過度な警戒感が和らぎ132円台を回復。10日、植田日銀新総裁の就任会見で金融緩和策の継続が強調される中、円売りが強まり133円台後半まで上昇。11日は新規材料なく133円台で推移すると、12日はユーロ円の上昇につられ134台に乗せ。しかし、米3月消費者物価指数(CPI)の結果が市場予想を下回ると133円付近へ反落。翌13日は米3月生産者物価指数(PPI)が市場予想を大きく下回ると、軟調な米金利を眺めながら132円付近まで急落。14日にウォラーFRB理事のタカ派発言や、米シンガン大が調査した1年後期待インフレ率が市場予想を上回ると、133円台後半まで反落した。17日、米金利の上昇を横目に134円台前半まで上昇すると米4月NY連銀製造業景気指数の堅調な結果が好感され、134円台半ばまで上伸。18日、一時134円台後半まで上昇後、失速したものの、良好な米経済指標やFRB高官によるタカ派な発言を背景に134円付近を推移。19日は上昇する欧州金利を横目にドル/円も上値を迫る展開となり134円台後半に続伸。海外時間に「日銀は4月会合でのYCC修正に慎重」との報道を受け円売りが強まると135.14円をつけた。20日、米金利低下につられ軟調に推移。21日、本邦3月CPI発表でコアコア指数が予想以上に伸びたことから日銀の政策修正期待の円買いが先行し、133円台半ばまで下落したが、良好な米指標の結果を受けて134円台を回復。24日、改めて植田日銀総裁から緩和維持を示唆する発言がなされ134円台半ば付近を底堅く推移。25日、米中堅銀の期待外れな決算内容を受け金融システム不安が再燃、米金利低下とともに133円台半ばに下落。26日、リスクオフ地合いが継続する中、米金利低下につれ安となると133.01円まで下落するも、終盤にかけては133円台後半まで買い戻された。27日、米1～3月期コア個人消費支出デフレーター(速報)が市場予想を上回る伸びを見せ、一時134円台前半まで反転上昇。28日、日銀金融政策決定会合の結果をうけ、134円台後半まで上昇後、植田総裁の会見が始まると円売りが強まり、月高値となる136.56円まで値を伸ばす展開となった。

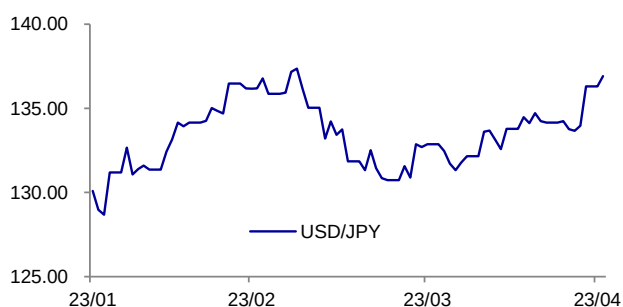
■ 今月の見通し

5月のドル円は底堅い推移を予想。先月末の日銀会合では、従来の金融緩和策を据え置いた。4月24日に開催されていた衆院財務金融委員会での植田新総裁の発言(“現行のYCCによる金融緩和継続が適当”、“金融政策効果発現の時間考慮し、現在は緩和継続と決断”、“インフレ率が下方に行くリスクを重く見て金融緩和を継続”)と概ね同様の結果となったが、加えて、多角的なレビューの実施を示唆。レビュー自体に真新しさはないが、その期間が1年から1年半程度の時間をかけることが明かされた。必ずしも当該期間中の政策修正がなくなった訳ではないが、レビューの実施が政策修正を占う入り口と考えれば、少なくとも当面の間、日銀リスクが顕在化する可能性は低くなった印象。市場で警戒されてきた政策修正期待が後退したことで、昨年12月以降続いてきた円買い圧力は弱まることになりそうだ。

米国では5月2日～3日にFOMCが開催される。3月会合の声明文ではタカ派のトーンがやや後退したが、25bpの利上げを決定し、パウエルFRB議長からは必要であれば利上げを継続する姿勢が示された。足許の米経済指標は強弱区々だが、発表が始まった米主要企業の決算は、金融不安を再燃させ、市場を悲観一色に染めるほど弱い結果ではなく、危ぶまれた5月会合での25bp利上げは既定路線となっている。CPIやPPIにピークアウト感が見られるも、1年先のインフレ期待値やコアPCEなどは依然として高止まりしており、Fedがハト派転換するほどの状況ではないであろう。5月利上げで年内打ち止めとなったとしても、高金利が維持されると考えられ、ドル円は確りとした推移を想定。

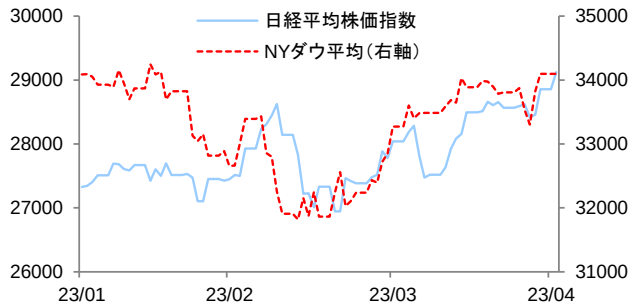
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	ISM製造業景況指数	3月	47.5	46.3	47.7
4/5	ISM非製造業景況指数	3月	54.4	51.2	55.1
4/7	非農業部門雇用者数変化	3月	230k	236k	311k
4/7	失業率	3月	3.60%	3.50%	3.60%
4/12	CPI	3月	0.20%	0.10%	0.40%
4/14	小売売上高	3月	-0.50%	-1.00%	-0.40%
4/27	GDP (年率/前期比)	1Q	1.90%	1.10%	2.60%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	10名	138.00 ～ 132.50	ベア	6名	137.75 ～ 131.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

河合	ブル	138.00 ～ 132.00	4月の日銀金融政策決定会合にてフォワードガイダンスは廃止されたが、植田日銀総裁の会見で金融緩和を続ける意向が示され、日銀の早期金融政策正常化期待の剥落から、ドル円はじり高の展開を予想。	山口	ブル	137.00 ～ 133.00	米国ではインフレの落ち着きがまだ確認出来ず、FRBは金融引き締めスタンスを継続する見通し。一方、日銀は4月会合で当面は緩和スタンスを維持する姿勢を打ち出している。政策の違いからドルは底堅く推移すると予想。
宮地	ブル	138.50 ～ 133.00	注目されていた日銀金融政策決定会合では、YCC政策の修正が見送られてたことで、市場での円高に対する思感が後退。少なくとも各主要国通貨とは金利差の観点から、円が売られやすい地合となった公算大。	松永	ベア	137.50 ～ 132.00	足許で景況感の悪化がみられる中、ドルを買い進む動きは次第に弱まるとみるが、FRBのインフレ抑制姿勢という大きな方向性が変わらない中、円を買い進む動きも想定しづらい。130円台前半でのレンジ推移を予想する。
加藤	ベア	138.00 ～ 128.00	検証を始めれば、学者さんである植田日銀総裁は現在の金融政策の無理を実感せざるを得ない。米国の利上げフェーズの終了ともあいまってドル/円の上値は徐々に重くなる。	原田	ベア	138.00 ～ 133.50	足許の経済指標では、根強いインフレ圧力が確認できるが、GDPは予想以上の軟化を始めている。月初に発表される雇用関連指標は底堅い数字となるだろうが、景気動向を鑑みると利上げペースは昨年と異なり、ドル円は弱含みを予想。
山崎	ブル	138.00 ～ 134.00	月末にあったBOJではYCCの見直しタイミングがマーケットが想定する6月より遅くなるという印象を受けたことから、一旦はドル円上昇(円安)推移を見る。海外の動きにも注意は必要ながら、当面上を予想。	上遠野	ベア	137.00 ～ 129.50	世界的な金融不安、米国スタグフレーション懸念を背景にFed利上げサイクルの転換点が意識される局面。米金利の低下とともにドル円は上値の重い展開をみておきたい。
伊藤	ベア	137.00 ～ 130.00	米利上げフェーズの最終局面が近づく中、日米金利差を背景としたドル円上昇は限定的。一方で日銀新執行部は市場にハト派の印象を与えることに成功。また実需の買い需要も旺盛であることから下値は堅い。金融危機再燃に注意。	小林	ブル	137.50 ～ 133.00	米インフレが高止まりしており、追加利上げへの期待がされている一方、4月末開催の日銀金融会合にて改めて日銀の緩和スタンスを確認。金融政策の方向性に違いを背景にドル円は円安トレンド継続となろう。
山岸	ブル	138.00 ～ 132.00	米コアインフレ率は4%台で高止まり、タイトな労働需給環境からインフレ収束見通せず、5月FOMCで利上げ打ち止めを明確に示さない可能性も。年20兆円規模の本邦貿易赤字で需給面から円売りニーズも強く、ドル円は底堅い展開予想。	逸見	ブル	138.00 ～ 132.00	日銀による緩和策維持と政策転換に時間を要するという認識の下、根強い円売り圧力が想定される。加えて、米利上げも控えており日米金融政策差からドルが選好され易く、ドル円は底堅い推移を想定。
尾身	ブル	138.00 ～ 132.00	今月も米国の高い政策金利の維持と、日銀の金融緩和と政策維持によりドル/円はドル高円安傾向が維持されると予想。但し、FRBが利上げ停止となると一時的にドル売りが強まる可能性があるか。	鈴木	ブル	139.00 ～ 133.00	日銀の緩和継続姿勢により、円売り地合いは当面続くと思われる。米国の利上げ停止思惑による下押し圧力には警戒が必要だが、相対的な円売り需要の強さに、じり高推移となることを予想する。
上野	ブル	138.00 ～ 130.00	米利上げは終盤であることは間違いないが、米インフレ指標は市場の想定よりも緩やかな低下になる可能性も。日銀の早期政策修正期待は剥落している状況下、小確りした展開がメインシナリオか。リスクは米金融機関の動向。	大熊	ベア	138.00 ～ 133.00	日銀は金融緩和と策の維持を決定したものの、今後は徐々に引き締めに向かうと思われる。一方で、米国の景気後退懸念は高まっており、金融システム不安も払拭されていない状況下では、ドル/円の上値は重くなると予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.0900 ~ 1.1300
EUR/JPY 146.00 ~ 155.00

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

■ 先月の為替相場

第1週。3日のユーロ/ドルは1.0803でオープン。OPECプラス会合後の原油高を受けたドル買いを背景に1.07台後半に下落も軟調な米経済指標の結果を受け1.09ちょうど付近へ上昇した。4日、市場予想を下回った米求人統計を受けた、ドル売りから1.09台後半に続伸した。5日、6日、ポジション調整のドル買いで1.09を割り込む場面もあったが、その後1.09台前半を回復した。7日、米3月雇用統計のまずまずな結果を受けたドル買いからユーロ売りが強まる場面もみられたが、概ね1.09台前半での推移が継続した。

第2週。10日のユーロ/ドルは1.0914でオープン。植田日銀新総裁の当面の緩和継続発言を背景としたドル/円の大幅上昇に、ユーロ/ドルは1.08台前半まで下落。11日は材料難の中、1.09を挟んだ値動きに終始。12日は米3月CPIが予想を下回る結果となると全面ドル売り。FOMC議事要旨でハト派色の強い内容が確認されたことも拍車をかけ、ユーロも1.10まで水準を上げた。13日は米経済指標の軟調な結果やECBメンバーのタカ派な発言が材料視され、1.10台半ばまで上昇。14日はミシガン大学消費者マインドの結果にドル買いが強まり、1.09台後半まで下落した。

第3週。ユーロ/ドルは1.09台を中心に狭いレンジで推移した。17日、1.01ちょうどを付けるも、堅調な米経済指標を受けた米金利上昇に1.09台前半に反落した。18日、19日は1.09台で動意なく推移。20日、一時1.09台前半に急落も3月ECB政策理事会議事要旨にて、根強いインフレリスクが確認されると1.09台後半に値を戻した。21日、ユーロ圏4月S&Pグローバルサービス業とコンポジットPMIの強い結果や複数のECBメンバーの利上げに関するタカ派色の強い内容を受け上伸。1.10ちょうど手前で越週した。

第4週。24日、ユーロ/ドルは1.0992でオープン。独4月IFO企業景況感指数の強い結果を受け独金利は上昇、1.10台半ばへ上昇した。25日、金融不安が再燃する中で独金利は急落し、1.09台半ば付近に反落した。26日、独5月GfK消費者信頼感が市場予想を上回ったことがユーロ買いに繋がり、13か月ぶりの高値となる1.1096に上昇した。引けにかけては米金利の反転上昇で1.10台前半に値を戻した。27日、米インフレ指標の強い結果を受け米金利が上げ幅を広げたことで一時1.10を割り込んだ。28日のユーロ/ドルは、ドル買いの一服を背景に1.10台前半での取引となっている。(4月28日東京12:00時点)

■ 今月の見通し

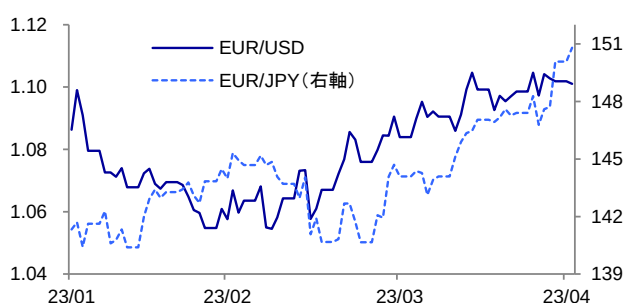
今月のユーロ/ドル相場は米国が景気減速感を背景とした利上げ停止観測の高まりを示しているのに対して欧州がコアインフレの根強さを背景とした利上げ継続スタンスを示していることを背景に堅調推移を予想する。

5月初に開催されるECBとFOMCの結果が大きな相場材料となるだろう。ECB議事要旨(3月開催分)では、SVB破綻を起因とした国際的な金融不安が高まる中でも非常に大多数のECB高官が+50bp利上げを支持したことが明らかにになった。3月のユーロ圏CPIは6.9%と前月(8.5%)と比較すると大幅な低下が確認されるが、内訳を確認するとエネルギーの低下が主な要因となっており、肝心のサービスインフレについては前月比から上昇していることが確認できる。以上の理由からECBの利上げ継続スタンスも納得できよう。利上げ幅に関して足許のマーケットでは+30bp利上げが織込まれており、+25bpと+50bpで予想が割れている様相だ。仮に+25bpの利上げとなり前回会合から利上げ幅の縮小をした場合においても、ユーロが弱含むことが想定されにくい。利上げ幅の如何に関わらず、利上げスタンス自体は継続するのがメインシナリオでありユーロ相場には上昇圧力となる。加えて、景況感を示すユーロ圏4月PMIについても、製造業については前月比から低下し50割れの水準での推移が継続しているもののコンポジット、サービスともに前月比から上昇し50台半ば付近での結果となっていることもユーロの底堅さをサポートすると予想する。

一方で、SVB破綻以降に景気後退懸念が高まっている米国については、4月中に発表された製造業を中心に景況感を示す経済指標の結果がやや弱含み、ネガティブ材料への反応が強い状況が継続している。利上げについても早期に利上げ据え置きも囁かれる中、FED高官の発言もあり足許のマーケットでは5月FOMCにて+25bp利上げがほぼ織込まれている。インフレは根強いもののピークアウトが確認されたことに加え、SVB破綻はFEDの利上げの実体経済への影響が露わになった。今回はサプライズなく+25bp利上げを実施したとしても、今後暫くの間FF金利の据え置きが予想され、ドルの上値を抑えるだろう。また、米連邦の債務上限問題が徐々に材料視され始めるとドル安圧力の高まりの一因となるだろう。

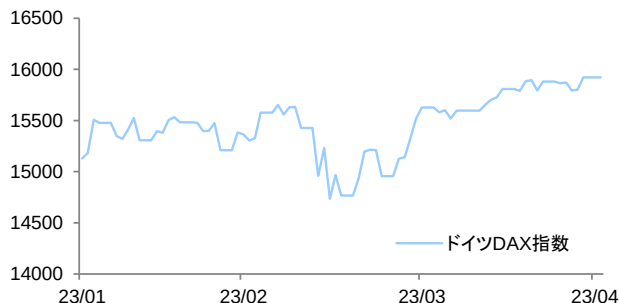
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/4	ユーロ圏PPI(前年比)	2月	13.3%	13.2%	15.1%
4/13	独CPI(前年比)	3月	7.4%	7.4%	7.4%
4/18	独ZEW景気期待指数	4月	15.6	4.1	13.0
4/18	独ZEW調査現状指数	4月	-40.0	-32.5	-46.5
4/19	ユーロ圏CPI(前年比)	3月	6.9%	6.9%	8.5%
4/21	ユーロ圏コンポジットPMI	4月	53.7	54.4	53.7
4/21	ユーロ圏製造業PMI	4月	48.0	45.5	47.3
4/21	ユーロ圏サービス業PMI	4月	54.5	56.6	55.0
4/24	独IFO企業景況指数	4月	93.5	93.6	93.2

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ 見通しまとめ

ブル	13名	1.1300 ～ 1.0850	ベア	3名	1.1150 ～ 1.0700
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

河合	ブル	1.1300 ～ 1.0800	3月ECB政策理事会議事要旨では引き続き強いインフレ懸念が示されており、5月第一週に開催される欧米の金融政策決定会合にて、両者のスタンスの違い、とりわけECBのタカ派姿勢が示されることで、EUR堅調推移を予想。	山口	ベア	1.1150 ～ 1.0750	ECB理事会での政策金利の追加利上げが見込まれているものの、欧州圏内の物価はやや落ち着きを見せている。さらに、米国発の金融不安が深刻化するとリスクオフの流れがユーロの重しとなる。
宮地	ブル	1.1350 ～ 1.0950	足許、欧米の金融政策スタンスの差異がまさに明確となるタイミングとなることが濃厚。そうなると、金利差に着目した欧州通貨買いの市場環境は当面続くものと思われ、ユーロも上値を試す展開か。	松永	ブル	1.1200 ～ 1.0850	ECB利上げ局面がFRBよりも長期化する可能性が出てきている中、利上げサイクルの終了が意識されるドルに対して引き続きユーロは底堅い動きが継続しそう。
加藤	ブル	1.1400 ～ 1.0900	米国の利上げフェーズの終了はすなわち米欧の金利格差に直接影響する。結局は米ドルが対ユーロでは売られる圧力が高まるだろう。	原田	ブル	1.1150 ～ 1.0900	欧州圏内の物価はやや落ち着きを見せているものの、エネルギー価格などを除いたコア指数は高止まりとなっている。係る中、ECB理事会での政策金利の引き上げが今後も見込まれる中、ユーロはじり高の展開を予想する。
山崎	ブル	1.1350 ～ 1.0630	地政学的リスクが所与となる中で、各国のインフレ圧力も引き続いており、利上げ圧力・余力ともにあるEURは引続き上がりやすいものとする。景気後退・金融機関に関するヘッドラインには注意したい。	上遠野	ブル	1.1200 ～ 1.0850	高止まりするコアインフレへの対策を最優先としたECBタカ派スタンスを背景に対ドル強含み。金融不安の波及に配慮しつつも、目下米国との金融政策の対比感が焦点となる一ヶ月となる。
伊藤	ベア	1.1300 ～ 1.0700	FRBの利上げ打ち止め観測に比べて、ECBには利上げ余地があり、EURはUSDに対して強含みやすい。ただ、利上げに対して期待が先行しており、織込みが進めば上値が重くなる見込み。リスクオフ局面のEURロングの調整には注意。	小林	ベア	1.1150 ～ 1.0600	欧州圏におけるインフレ鈍化の兆しや米地銀の経営難を発端とする金融システムへの不安懸念が再燃した場合、リスクオフの地合いではユーロが売られる展開が想定され、ユーロは軟調推移を予想。
山岸	ブル	1.1300 ～ 1.0700	ユーロ圏コアインフレ率は上昇が加速、収束が見通しにくく、またPMIは11か月ぶり高水準で企業景況感も改善。ECBの利上げ継続観測からユーロは買われやすいも、節目の1.10到達で調整も入り、高値もみ合いの展開を予想。	逸見	ブル	1.1200 ～ 1.0900	欧州は依然としてインフレの高止まりが確認されており、ECBがFed対比タカ派な状況に大きな変化はない。年初来高値圏での値固め後、再度、上昇を開始すると予想。
尾身	ブル	1.1300 ～ 1.0800	ECBの利上げ継続により底堅い推移が継続すると考えている。但し、金融システム不安の話が出てくるとユーロの上値が重くなるか。	鈴木	ブル	1.1150 ～ 1.0900	欧州圏のコア部分の物価は依然として高止まりが続いており、ECBはタカ派姿勢が継続。利上げ停止が現実味を帯びるFOMCとの差異は明確であり、ユーロの堅調推移を予想する。
上野	ブル	1.1300 ～ 1.0800	利上げ余地という側面では依然として米国に比して欧州が大きい。一方で欧州において景気減速懸念や金融不安が完全に払しょくされている状況ではなく、引続き大きな上昇は望みにくい。	大熊	ブル	1.1300 ～ 1.0800	欧州の物価高を受けて、ECBによる利上げ継続懸念は継続、ユーロの金利先高観は根強い。対照的に米国はインフレ鈍化傾向が続いていることからユーロ買いに傾きやすく、堅調推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2200 ~ 1.2800
GBP/JPY 163.00 ~ 172.00

欧州資金部 中島 將行

■ 先月の為替相場

先月の英ポンド相場は、今年3月上旬以来の上昇トレンドに乗りつつも、対ドル1.25の定着に4度にわたり失敗、上値の重さを感じさせる展開となった。第1週は4日にかけて対ドルで1.23から1.25まで急騰した後、5日以降は下落し、もみ合う展開。3日発表の米3月ISM製造業景気指数、4日発表の米3月JOLT求人件数は弱い結果となり、米金利低下・ドル安が進んだ。4日にはBOEのビュー・チーフエコノミストが、「ベース効果とエネルギー価格の下落が相まって、今年は総合インフレ率が大きく低下すると予想されているが、国内要因による物価上昇が持続する可能性がある」と発言し、5月会合での追加利上げを支持する可能性を示した。しかし、リスクオフ相場の中ポンド上昇の勢いは続かなかった。第2週は10日から14日早朝にかけて上昇が続き、1.25を再び回復したが、14日午前中からは一転して下落に転じた。12日発表の米3月消費者物価指数(CPI)の下振れを受けて、ドル安が進行した。前日公表のFOMC議事要旨(3月会合分)で、米銀の破綻などの銀行不安を受けて、FOMC参加者のうち数人が政策据え置きを検討していると記述されたことも、こうした市場の動きを後押ししただろう。しかし、14日発表の米3月小売売上高や米4月ミシガン大学消費者消費者インフレ期待(1年先、速報)を受けてドルは反発した。英国では、ペイリー・BOE総裁が12日の講演で、金融安定性へのリスクによって同中銀がインフレとの闘いから注意をそらすことはない、と述べた。また、13日にビュー氏は、低水準の失業率が労働者に消費の余裕を生み、「プラスの需要ショック」が英国で見られる可能性がある、と述べている。第3週は、強いインフレ指標を受け対ドル・対円で上昇するも、週間を通せば上値の重い展開が続いた。19日に公表された英3月CPIは前年比+10.1%と2月分と同10.4%から伸びが低下も、同+9.8%への減速を見込んでいた市場予想を上回った。また、コアCPIの伸びも同+6.2%と前月から横ばいとなり、同+6.0%への減速を見込んでいた市場予想を上回った。第4週は、英国個別の材料に乏しいなか、グローバルなドルの値動きに左右される形でポンド相場も大きく上下に動いている。21日の夜に発表されたS&Pによる英国債の格付け見直し引き上げもあり、週明けにポンドは上昇、25日に対ドル1.25に今月3度目のトライをした後は、1.24まで一転して反落。その後、26日にはユーロ高に合わせ改めて1.25を上抜けるも、結局1.24台後半で引けた。27日東京時間、1.24台後半でじり高推移している。

■ 今月の見通し

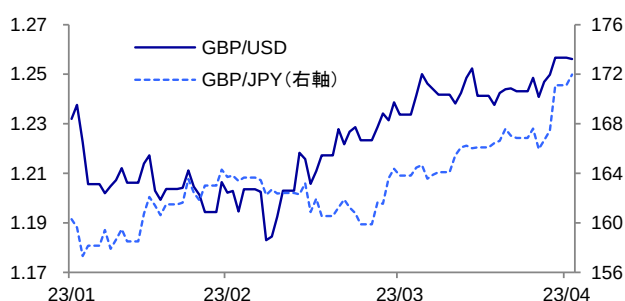
5月は第1週の3日(水)に控えるFOMCのコミュニケーションによって、その後の為替市場の動向が大きく左右される可能性があるものの、基本観として英ポンドの対ドルでの上昇を見込んでいる。それは、市場の米政策金利のピークアウト観測が大幅な修正を迫られなければ、英ポンドには一段の上昇余地があると見ているためだ。(1)英国の賃金・インフレ指標の上振れに伴う英金利の上昇に伴い、英国と米国の2年金利差は縮小した一方、英ポンドの対ドルレートの値動きは限定的に留まっており、金利に値動きに寄せる形で英ポンドが上昇する余地は残っていると見られること、(2)米商品先物取引委員会(CFTC)が公表しているポンドのポジションでは、売り越し額が2022年9月以降、縮小を続けていること、が理由である。ポンドは4月以降、対ドル1.25が上限となっているが、ここを上抜ければ上昇余地は大きいと見ている。英国個別の材料では、やはり11日(木)のBOE金融政策委員会が重要であろう。英3月CPIの上振れを受けて市場の利上げ期待は高まっている。短期金利市場の織り込みを見ると、5月会合での+25bpの追加利上げの確率が80%から100%に上昇しただけでなく、会合前には60%程度に過ぎなかった6月会合での+25bpの追加利上げ確率まで一時は100%に達した。市場が見込むターミナル・レート(政策金利の到達点)は4月18日の4.8%前後からCPI発表後は5.0%に近づいている。2022年10月に債券市場の混乱を受けてトラス前首相が辞任して以来の高水準である。改めて英3月CPIの内訳を見ると、市場予想対比でCPIの上振れにつながった最大の要因は食品・飲料価格の伸び加速だが、サービスインフレの高止まりも顕著である。サービス価格の上昇は人手不足とそれに伴う賃金の上昇が背景にある。CPIの前日の4月18日に公表された賞与を除く週平均賃金(2022年12月から2023年2月の3か月間)は前年同月比+6.6%となり市場予想の同+6.2%を上回っている。人手不足は他の先進国の労働市場でも広範に見られるが、英国はBREXITに伴う移民の流入低迷という構造的な要因もあり、長期化する恐れが大きい。こうした状況を受けて、BOEが市場の期待通りのタカ派姿勢を示すかが焦点となる。データから判断する限りその可能性は高いと見ているが、仮にBOEが景気への配慮姿勢を強く示すようであれば、ポンドには下落圧力がかかるだろう。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の人気映画事情』
2023年3月に着任いたしました。よろしくお願ひします。ロンドンで一番人気の観光地といえば、World of Harry Potterでしょう。私もロンドンに来て早々に家族で行こうと思ったのですが、5月末までチケットは全てソールドアウトでした。ロンドンにはキングスクロス駅の9と3/4番線やロンドン動物園をはじめ、ハリーポッターの映画のロケ地がたくさんあります。この映画がロンドンの観光収入の増加に役買っているのは間違いないと思います。ちなみに、ハリーポッターの映画はイギリスで撮影が行われていますが、製作は米国資本(ワーナーブラザーズ)です。英国政府は映画産業の人材の育成や投資環境整備に力を入れており、英国での外国資本による映画製作は右肩上がりが増えていくようです。2024年にはミュージカル映画の「ウィキッド」が公開予定ですが、製作のユニバーサルスタジオ(米国資本)は当初、米国のアトランタ州やジョージア州で撮影を行う予定だったものの、東イングランドのハートフォードシャーでの撮影に切り替えています。当地に作られた「オズの魔法使い」の世界を再現した巨大セットが現地報道でも話題になっています(景観を損ねる、という地元住民の声も取り上げられています)。『映画版刑事ジョン・ルーサー』での好演も記憶に新しいシンシア・エリボが“西の悪い魔女”エルファバ役、人気歌手アリアナ・グランデが“南の悪い魔女”グリンダ役を演じ、私も非常に楽しみにしている映画です。英国資本の映画制作会社も話題作を多く送り出しており(近年では米英共同製作の「ボヘミアン・ラプソディー」が日本でも大ヒットしました)、英国の映画産業は要注目です。

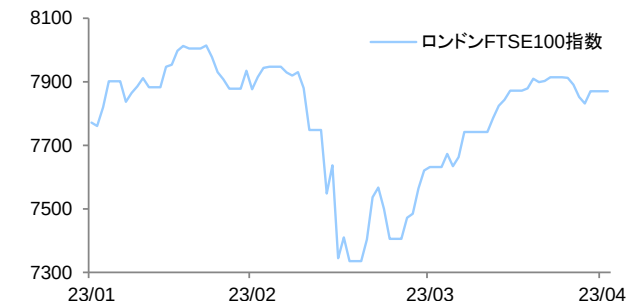
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/4	製造業PMI	3月	48.0	47.9	49.3
4/13	サービス業PMI	3月	52.8	52.9	52.8
4/13	RICS住宅価格指数	3月	-48%	-43%	-48%
4/18	GDP (前月比)	2月	0.1%	0.0%	0.3%
4/19	週平均賃金 (前年比)	2月	5.1%	5.9%	5.7%
4/21	消費者物価指数 (前年比)	3月	9.8%	10.1%	10.4%
4/21	小売売上高 (含自動車/前年比)	3月	-3.1%	-3.1%	-3.5%
4/21	製造業PMI	4月	48.4	46.6	47.9
4/21	サービス業PMI	4月	52.8	54.9	52.9
4/21	英国債格付け見直し	-	-	安定的	ネガティブ

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.6500 ~ 0.6850
AUD/JPY 87.50 ~ 91.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

4月の豪ドルは概ね0.66から0.68のレンジで推移したものの、月末にかけて0.65台へ沈む場面もみられた。第一週目、3日、軟調な米3月ISM製造業景気指数で米ドル売りが加速し0.6790まで急騰した。4日、RBA理事会で政策金利据え置きが決定し、声明文のフォワードガイダンスもハト派に傾斜したと解釈され0.67台前半へ下落。5日、RBNZが予想外に+50bpの利上げを発表しNZDが急上昇する中、連れ高となり一時0.6780を付けたが、ロウRBA総裁の講演原稿が発表され、「前日の金利据え置き決定は利上げ終了を示唆するものではなく、更なる引き締めが必要になる可能性がある」との記述に豪ドル買いとなった。週を通して軟調な米指標を背景に下値をサポートされる形となった。第2週目は堅調な豪4月消費者信頼感や底堅いアジア株、「中国が豪州産大麦への制裁関税を見直すことで両国合意」との報道、ハト派色の強い3月FOMC議事要旨、加えて逼迫した雇用環境を示す豪3月雇用統計結果等でドル売りとなった事などがサポート材料となり、概ね上昇トレンドとなるも、週末に反落。14日にウォラーFRB理事が「金融政策は一段の引き締めが必要」と述べたことや、米4月ミシガン大学消費者マインド指数や1年期待インフレ率が予想を上回った事ドル買いに拍車がかかり豪ドルは0.67台前半へ急反落した。第3週目は米利上げ継続観測の強まりを背景に上値重く推移しつつも、ややタカ派なRBA議事要旨に加え、中国1～3月期GDPが予想から上振れたことで人民元に買いが入り、豪ドルが支えられ、週を通して0.67を跨いで推移した。第4週目は、中国でコロナ感染再拡大の可能性から景気回復に対する不安が再燃し、軟調な中国元に連れ安となった事に加え、豪CPIが前回値を下回り、インフレ圧力の弱まりが示唆されると、次回RBA会合での据え置き観測が強まり、頭を押えられて推移した。また米銀ファーストリパブリックバンクがFRBが設けた緊急貸出制度へのアクセスを制限される可能性があるとの報道や燃るインフレリスクを示唆する米雇用データに反応し、銀行懸念から金融株中心に株が下げると豪ドルも一時0.65台後半へ下落した。月末は0.66台前半に戻し、越月した。

■ 今月の見通し

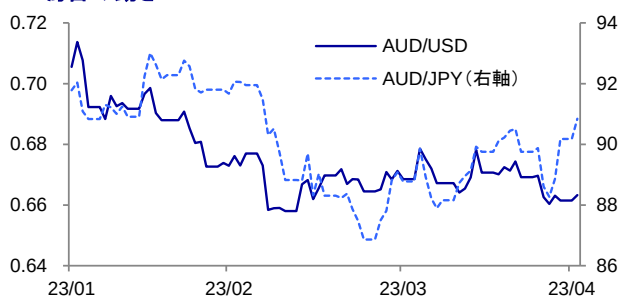
今月の豪ドルの動きは外部要因からの影響が大きくなる可能性が高い。2日にRBA理事会、3日にFOMCの金融政策決定会合が予定されており、時系列的には注目される米国金融政策の発表が後に予定されており、RBA会合で決定された豪金融政策単体では非常にポジションを取りにくい状態であるため、大きな動きがでるのはFOMC発表を待ってからとなる。

4月に発表された米国指標は米1～3月期GDP(速報値)の減速など、リセッションリスクへの懸念を再燃させるような軟調なデータが多かった一方で、月末には労働市場の底堅さ継続を示す米失業保険受給者数や米金融当局が注目する米1～3月期コアPCEが高い伸びが見られた。これまでの米金融当局者の発言では現段階でリセッションリスクよりはインフレリスクを懸念しているとみられる文言が多く、5月FOMC会合での市場期待は25bp利上げに傾斜する動きもみられる。但し、足元での米銀ファーストリパブリックバンクの経営難を考慮するとFRBは利上げを停止せざるを得ない状況でもある。これまでの強弱入り混じる指標データを基にFOMCがどのような決断を下すかで今後の豪ドルの方向性も見えてこよう。FRBが今月の会合で利上げを停止、ないしはハト派フォワードガイダンスを残す結果となれば、米金利低下からドル売りに傾く可能性が高く、また株価回復期待からも豪ドルは支えられる可能性がある。反対にFRBが今回追加利上げを決定する、ないしタカ派フォワードガイダンスを残した場合、金融当局者によるタカ派コメントが出た場合は米金利上昇から豪ドルは頭を押さえられる可能性が高い。

豪国内では豪雇用環境は逼迫した状態が続いている一方で、豪3月CPI月次インディケーターや豪1～3月期CPIでインフレ圧力の弱まりが継続していることが確認された。今年後半半にくる固定金利住宅ローンの金利リセッティングに向け、個人消費が弱まるとみられており、よって需要サイドからのインフレ圧力は緩らぐ方向に進むとみられる。これらの状況に鑑みるとRBAにとっでは利上げを急ぐ必要がない為、今月も豪政策金利は引き続き据え置きの可能性が高く、豪ドル上値はレンジを大きく超える事は考えにくい。引き続きこれまでの利上げ分の経済への影響について進展を精査したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/4	RBAキャッシュレイト	4月	3.6%	3.6%	3.6%
4/6	貿易収支	2月	A\$11223m	A\$13870m	A\$11266m
4/13	失業率	3月	3.60%	3.5%	3.5%
4/13	正規雇用者数変化	3月	-	72.2k	79.2k
4/13	非常勤雇用者数変化	3月	-	-19.2k	-15.6k
4/19	RBA議事要旨発表	4月			
4/26	月次CPIインディケーター	3月	6.5%	6.3%	6.8%
4/26	CPI(前年比)	1Q	6.9%	7.0%	7.8%
4/26	CPIトリム平均値(前年比)	1Q	6.7%	6.6%	6.9%

カナダドル相場

予想レンジ:

USD/CAD 1.3200 ~ 1.3800
CAD/JPY 96.00 ~ 100.80

米州資金部カナダ室 岩田 保子

■ 先月の為替相場

月初は、サプライズのOPECプラスによる協調減産発表を受け、原油価格が上昇する展開にCADが買われ、USD/CADは2月21日以来となる1.35を割り込み、1.3407まで下落(4/3)。4/6に発表された3月のカナダ雇用統計は雇用ネット変化が予想を大幅に上回り、失業率も過去最低水準の5.0%を維持したものの、時間当たり賃金が前月から低下。さらに翌日発表された3月米雇用統計では非農業部門雇用者数が予想を上回り、失業率も前月から低下したことで、USD買い・CAD売り優勢となり、USD/CADは1.35台前半まで値を戻した。

中旬にかけては、米金利上昇を背景にUSD/CADは1.35台半ばをつける場面もあったが、4/12に発表された米国の3月CPIが総合で前月から低下したこと、さらには翌日発表された米国の3月PPIも予想を下回ったことからUSD売りが進み、USD/CADは1.3302まで下落した。しかし、その後発表された米経済指標ではインフレ減速の手がかりが見当たらず、加えてFRB高官からもタカ派的な発言があったことから、さらなるUSD安には至らなかった。

中旬以降は、米国で発表される第1四半期の企業決算や経済指標、原油価格や米株価、米金融当局者の利上げに関する発言が意識されると同時に、カナダの2月小売売上高や3月住宅着工件数が軟調な結果になったことから、1.33台半ばから1.34台へと徐々にUSD高が進む展開となった。

4月最終週においては、米地銀ファースト・リパブリック・バンクの決済報告を受け、市場で銀行不安が再燃。米株価、原油価格が大幅に下落するなか、リスク回避のUSD買いが進み、USD/CADは約1か月ぶりに1.36台をつけ、1.36台半ばまで急速にUSD高が進んだ。

■ 今月の見通し

4/12のカナダ中銀会合では、前回に続き金利据え置きを決定。同時に発表された経済見通しでは、住宅ローン金利上昇による金利負担増のため消費が減速、海外の需要減で輸出や設備投資が抑制され、今年後半から成長は減速し、GDPは2023年1.4%(1月時点の予測1.0%)、2024年1.3%(同1.8%)との予測が示された。またインフレ率については、2023年半ばには3%台へ低下するものの、特にサービス価格やインフレ期待、賃金上昇率の高止まりで2%台への回帰は困難とし、これまでの金利引き上げの影響を評価しながら、インフレ率を2%台へと戻すため、必要ならばさらなる金利引き上げも辞さない姿勢を維持した。実際に、4/18に発表されたカナダの3月CPIは総合ではガソリン価格の下落により、2月の前年比+5.2%から同+4.3%へと大幅に低下したが、コアは4.85%から4.5%へと小幅な低下に止まっている。今のところ年内の利下げはなし、政策金利は現行の4.50%維持が予想される。

一方、FRBは金融システムへの不安が残るなか、3月FOMCでFFレートを0.25%引き上げ。ドットチャートで示されたように、利上げ回数も5月のFOMCを最後に残り1回とほぼ見通しが固まってきた。

このように米国、カナダの政策金利がターミナルレートに近づきつつある中、今後のUSD/CAD相場見通しの焦点は、経済動向(ソフトランディング or ハードランディング)になると予想。

目下市場では、弱い米経済指標は市場のセンチメントの悪化→リスク回避のUSD買い・CAD売りを招いている。今のところ、銀行不安は一部金融機関に限定されているようだが、今後景気後退懸念が深刻化してきた場合には、市場ではFRBの利下げ観測が高まり、米金利低下→USD下落という動きに変わっていく可能性はありうる。反対に、米経済がソフトランディングに向かい、かつインフレ率が低下しない場合は、一段の利上げも考えられ、米金利の上昇に伴い、USD買いが進む局面も考えられる。

5月についてはカナダ中銀会合はなく、FOMCの結果や米政府の債務上限問題など米国の経済・政治情勢中心の展開になり、USD/CADは1.32~1.38と予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

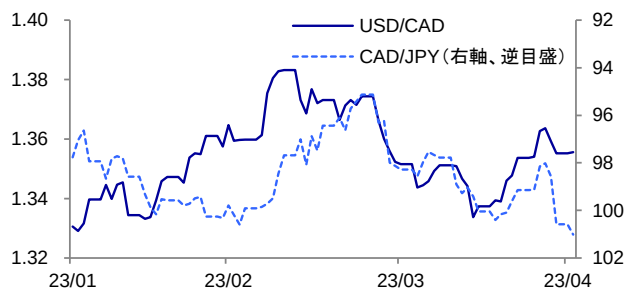
『当地の映画事情について』

実はトロントには、“北のハリウッド(Hollywood North)”との別名があります。映画のロケ地として人気で、数々のハリウッド映画やテレビ番組がトロントで撮影されています。みずほのカナダ支店があるダウントウンのオフィス街でも、通行が止められ、撮影が行われていることもしばしばです。理由としては、街並みがニューヨークやシカゴに似ている、米国から近く撮影機材の移動がしやすい、トロント市が全面的に協力、税金が優遇されている、移民が多いので色々な人種のエキストラを集めやすいなど、諸々あるようです。有名なところでは、トロント大学をMITのキャンパスとして撮影したマット・デイモン主演の「グッド・ウィル・ハンティング」、メーガン妃も出演していた「SUITS/スーツ」があります。

また、トロント出身の有名な俳優さんも多くいて、トップは何といってもキアヌ・リーブス。幼少期をトロントで過ごしたそうですが、飾り気のない、肩の力が抜けた感、カナダ人のいいところを体現しているような感じがします。

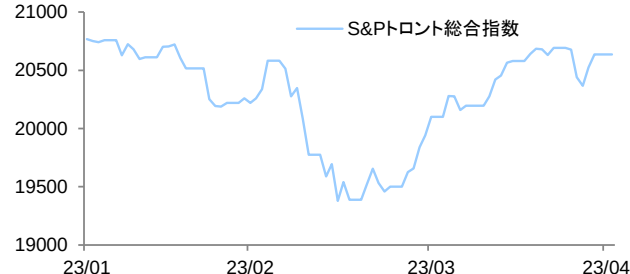
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	S&P Global カナダ製造業PMI	3月	-	48.6	52.4
4/6	雇用ネット変化	3月	7.5k	34.7k	21.8k
4/6	失業率	3月	5.1%	5.0%	5.0%
4/14	鉱工業生産売上高	2月	-2.7%	-3.6%	4.1%
4/18	CPI (前年比)	3月	4.3%	4.3%	5.2%
4/19	コアCPI(前年比)	3月	4.5%	4.5%	4.7%
4/19	住宅着工件数	3月	237.5k	237.5k	240.9k
4/21	小売売上高(前月比)	2月	-0.6%	-0.2%	1.6%
4/28	GDP(前月比)	2月	0.2%	0.1%	0.5%
4/28	GDP(前年比)	2月	2.6%	2.5%	3.0%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1310	～	1370
KRW/JPY	9.620	～	10.200
JPY/KRW	9.800	～	10.400

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 山内 脩平

■ 先月の為替相場

4月のドル/ウォン相場は底堅い推移。4月3日のドル/ウォンは1,306.2にてオープン。2日の休日にOPECプラスが予想外に追加減産を発表したことで原油価格が上昇。インフレ再燃が懸念されたことでドルが上昇し、ウォンは売られた。3月韓国貿易収支(結果:▲46.2億ドル、予想:▲60.0億ドル)は予想比改善を示したものの、ウォン相場への影響は限定的だった。その後、米経済指標が軒並み低調な内容となったことでウォンが強含み1,300台前半まで下落した。一方で、6日にかけては米指標の軟調な結果に新興国通貨が売られたことでウォン安となり、1,320レベルでの推移となった。その後はイースター休暇に伴い、アジア・欧米の主要マーケットでの休場が続き1,320ウォン付近での小幅な値動きが継続した。11日のBOK会合では市場予想通り政策金利の据え置きが決定され、相場は反応薄だった。12日にドル/ウォン相場は1320台後半まで上昇するも、13日に韓国中銀と国民年金公団において為替スワップの締結合意が発表されると、為替介入と見られる取引も相まって14日にかけてドル/ウォンは急落。1,300ウォンを割り込み月安値の1,294.7まで下落した。しかし、一転して17日以降はウォン安が進行。米シガン大指数より、期待インフレ率が上昇したことや、英インフレ率の上昇を受け米・欧インフレ長期化が意識されたことで、ドル/ウォンは上昇、韓国企業の配当金に関連したウォン売/ドル買のフローもドルウォンの上昇をサポートした。25日に年初来高値までドル/ウォンが上昇すると、当局から為替介入が実施され、1,330ウォンレベルまで急落。しかし、その後海外時間に米統計が悪化したことで、新興国通貨が売られ再度ウォン安に。26日には1,342.9となる月高値を記録。27日クローズ時点でドル/ウォン相場は前月比36.1ウォン上昇した1,338.0で引けた。

■ 今月の見通し

5月のドル/ウォンは底堅い推移の継続を予想する。

5月のドル/ウォンに影響する主な材料は以下の2点。
①インフレ推移とFRBによる金融政策②BOKによる金融政策

①5月FOMCにおいては+25bpの利上げがコンセンサスであるが、足許再燃している米地銀に対する経営不安や一部の軟調な経済指標を勘案すると米利上げ局面の終了が意識され易い状況。米政策金利の見通しに大幅な修正がなければ一時的にドル買いは落ち着く可能性も。

②4月11日にBOKは政策金利(3.5%)の据え置きを決定。足許の景気認識やインフレ見通しに大きな変化は無いものの、今年のGDP見通しについては2月末の見通し(1.6%)を小幅に下回るとした。また、今年後半の利下げ開始を見込む金利環境については、インフレ抑制には未だ高い不確実性があると強調し、けん制した。次回BOK会合は5月25日に予定されるも政策金利は現状維持がコンセンサスであり、ウォン買い圧力は限定的なものとなる。

上記より金融政策面において目新しい材料ないものの、一方で、ドル/ウォンの上昇局面では4月にも複数回介入とみられる動きが観測されており、5月においても介入への警戒感が一時的にドル/ウォン相場の重しとなる。一方で、半導体市場の回復は遅れており、韓国の貿易赤字は定着。ウォン買い実需も細っている他、株式市場も決して順調と言えない状況ではウォン買い材料に乏しく、5月のドル/ウォン相場は底堅い推移を想定する。

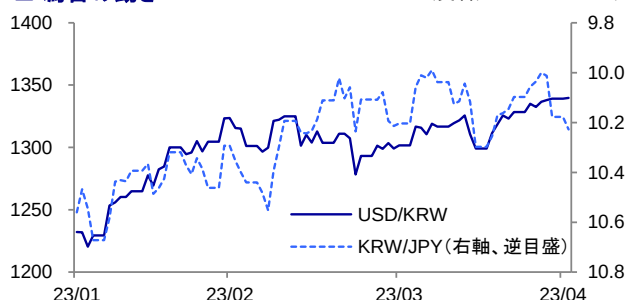
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の映画事情について』
初めまして、4月よりソウル資金室に着任した山内と申します。以後よろしくお祈いします。

韓国の映画事情についてですが、まだ当地の映画館には行けておりません。ショッピングセンターにもあまり出かけていないので、どこに映画館があるかもわからない状態です。
一方、現地スタッフに当地の事情をヒアリングしたところ、コロナ以降の巣ごもり需要に因應するため、最近韓国では映画よりもNetflix等サブスクリプションコンテンツ向けの作品制作に力を入れているそうです。その為、最近韓国産の映画で大ヒットしたものは無く、海外映画が話題になっているそうです。
最近ではやはり、スラムダンクやすずめの戸締まりがヒットしているそうで、すずめの戸締まりは邦画歴代観客動員数1位の興行記録を更新したとのことでした。
また、映画館ではポップコーンの他、バター醤油で味付けされたさきイカが定番のお供になるそうです。
私も機会があればぜひ試してみたいと思います。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	貿易収支	3月	-6,000M	-4,620M	-5,300M
4/1	輸出(前年比)	3月	-16.0%	-13.6%	-7.5%
4/1	輸入(前年比)	3月	-6.5%	-6.4%	3.6%
4/4	CPI(前月比)	3月	0.2%	0.2%	0.3%
4/12	失業率	3月	2.8%	2.7%	2.6%
4/21	PPI(前月比)	3月	-	3.3%	4.8%
4/25	GDP(前期比)	1Q	0.2%	0.3%	-0.4%
4/26	消費者信頼感	4月	-	95.1	92.0
4/28	鉱工業生産(前年比)	3月	-10.2%	-7.6%	-8.1%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.40 ~ 30.90
TWD/JPY 4.26 ~ 4.47

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

4月のドル/台湾ドルはリスクオフの流れが強まり、上昇。

連休により月初は4月6日から取引開始。連休中に発表された米経済指標を受けて、景気後退リスクが意識され、30.500とギャップアップしてオープン。米国株安だけでなく、蔡総統が米国でマッカーシー米下院議長と会談したことから地政学リスクが意識され台湾株が軟調に推移すると台湾ドル売りが優勢となったものの、30.5台では輸出企業のドル売りも入り、上値が重い展開となった。

月央では、蔡総統の米国での会談に対抗する形で中国が大規模演習を行ったものの、台湾株への影響は限定的で、為替相場も方向感がなく30.4台後半で推移。14日には台湾株が反発すると台湾加権指数が16,000ポイントに迫り、約10か月ぶりの高値をつけるとドル/台湾ドルは一時30.405まで下落した。しかし、その後は良好な米経済指標から5月FOMCでの利上げが意識されると30.5台に戻した。

月後半に入ると20日には30.6台にのせ、ドル高の流れに輸出企業も様子見し、上値を押さえることなく、30.6台前半で推移。さらに米地銀の決算内容を受けて金融システム不安が再燃するとリスクオフの流れから台湾株安となると台湾ドルも売られ、26日には一時30.750まで上昇。しかし、月末の輸出企業のドル売りから上値を押さえる動きもあり、その後は30.7台前半での推移となった。

■ 今月の見通し

5月のドル/台湾ドルはレンジでの推移を見込む。

4月は地政学リスクが意識される場面もあったものの、台湾ドル安の主要因は、景気後退懸念であった。3月は金融システム不安から米国の利上げ打ち止めが意識され、台湾株が買い戻されたが、4月に金融システムへの警戒感が高まった際には景気後退が意識され、台湾株安台湾ドル安となった。

5月についてもドル/台湾ドルは世界的な景気見通しからの台湾株の動きに左右されるであろう。台湾の2023年第一四半期GDPは前年同期比▲3.02%と市場予想以上に悪化した。輸出が大きく減少したのが主要因であるが、台湾中銀や行政院の2023年通年見通しである2%台前半の成長率の達成は困難かもしれない。さらに、この見通しはシリコンサイクルから2023年後半からは半導体を中心に輸出が回復することが前提であり、世界的に景気が低迷した場合、最終消費財の購買意欲は減退し、想定通りに半導体需要、輸出が回復しない可能性がある。半導体製造大手も第一四半期決算発表の際に2023年の半導体売上高が前年比減少するとの見方を示している。ただし、5月の段階では景気後退が来るのか、まだ分からないため、引き続き、欧米の金融政策や経済指標の内容、金融不安の高まりに台湾株も一喜一憂し、ドル/台湾ドルもつられて左右するであろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

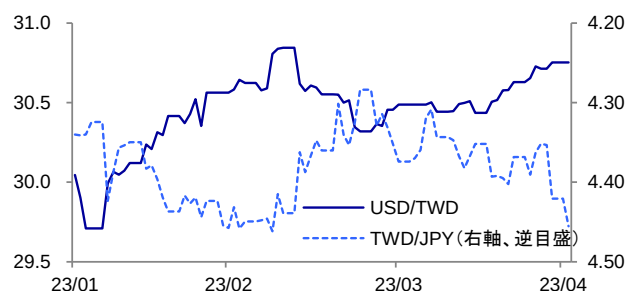
『当地の映画事情』

当地の映画館で上映される映画はハリウッドや日本のアニメ映画がメインですが、ミニシアターでは台湾映画も比較的上映されています。台湾では、80年代から台湾社会を取り上げたテーマの映画が多く制作され始めました。金獅子賞を受賞した「非情城市」を代表に、社会経済・政治を実生活に基づいたストーリーで描くのが台湾映画の特徴的です。その後はラブストーリーを加えた作品も増えてきましたが、最近では、ホラー映画に注目が集まっています。

人間や社会を描写してきた台湾映画にとっては、それらの根源的な恐怖を表現するのが得意としたようで、今までのホラー映画とは異質の怖さを表現しているようです(すいません、見ていないので受け売りです)。昨年は「呪詛」が日本でも流行ったので、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、史上最も怖いとフレンチの映画です。これから暑くなる季節だからといって、涼をとるために見るのであれば、覚悟を持って見た方がいいようなので、ご注意ください。

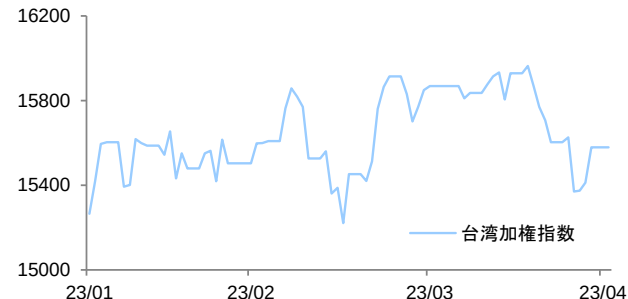
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/10	外貨準備高	3月	-	560.28B	558.37B
4/11	輸出(前年比)	3月	-15.4%	-19.1%	-17.1%
4/11	輸入(前年比)	3月	-11.4%	-20.1%	-9.4%
4/11	貿易収支	3月	2.71B	4.22B	2.35B
4/11	CPI(前年比)	3月	2.20%	2.35%	2.43%
4/20	輸出受注(前年比)	3月	-18.6%	-25.7%	-18.3%
4/24	鉱工業生産	3月	-12.30%	-14.52%	-7.66%
4/24	失業率	3月	3.60%	3.59%	3.58%
4/28	GDP速報値	1Q	-1.25%	-3.02%	-0.41%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8200 ~ 7.8500
HKD/JPY 16.50 ~ 17.50

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【4月の香港ドル直物相場】

4月の香港ドル直物相場は、米ドルと香港ドルの金利差が維持された為、基本的にはベッグ制の下限である7.85レベルで推移した。米国発の金融システム不安が一服したことで、米国連邦準備理事会(FRB)はインフレ抑制を優先して5月に再び25bpの追加利上げを実施すると予想されている。市場参加者が米ドル買い/香港ドル売りのキャリートレードのポジション構築を継続したことが一段の香港ドル安圧力となっていた。しかし、HKMAは米ドルベッグ制防衛の為、香港ドル買い為替介入を実施。これによりアグリゲートバランスは一段と減少し、一部の市場参加者は香港ドルの市中流動性減少を警戒して利益確定の為に米ドル買い/香港ドル売りポジションの解消に動いた為、市場のボラティリティも増大した。株式市場に目を向けると、中国本土の投資家が割安なH株に注目した為、ストックコネク(中国本土市場との株式相互取引制度)による香港株式市場への資金流入額が1,000億香港ドル超まで増加した。一方でIPO活動については再開の兆しが見られたものの、香港ドル直物相場を下支えする程の勢いはなかった。

【4月の香港ドル金利市場】

HKMAが米ドルベッグ制防衛のために香港ドル買い介入を実施したことで、香港ドルのアグリゲートバランスは15年ぶりの低水準となる490億香港ドルまで減少した。これは前回利上げ局面である2019年から2020年にかけての水準を下回っており、歴史的な水準に達していると言える。急激な流動性危機は起こらなかったものの、香港ドル需要が急激に高まった場合に備え、市場参加者は今後の動向を警戒感を持って注視していただく。香港ドルHIBORの1カ月物は3.3%、と3カ月物は3.7%近辺まで上昇したが、米ドルLIBORとの金利差(香港ドルHIBOR-米ドルLIBOR)は引き続きマイナスのまま。一方で、香港経済の先行き不透明感や、不動産市場の低迷による住宅ローン需要減退が影響し、中長期金利は上値が重かった。また、市場参加者は5月のFOMC政策決定会合の発表に向けて警戒感を強めており、米ドル中長期金利も上値重く、香港ドル金利が米金利に追随したとも言える。FRBの政策金利見通しに対する見方は依然分かれており、香港ドルの長短金利差(3か月物HIBOR-3年物スワップ金利)はプラスとマイナスの値を行き来している。

■ 今月の見通し

【5月の香港ドル直物相場】

FRBの利上げサイクルは近いうちに終息するとの見方が強いものの、インフレ率は依然高水準にいたため、今後数ヶ月の間にすぐに利下げに転じることはないだろう。また、香港ドルの流動性が逼迫している中でも資金需要はまだ弱く、香港ドル短期金利は低位での推移が続いている。その為米ドルと香港ドルの短期金利差は広がったままであり、香港ドル直物相場もベッグ制の上限である7.85近辺での推移が続くと見ている。また、中国のリオープンによる経済回復期待が弱まってくれば、香港株式市場への資金流入も細る可能性が高い。再燃している米中対立激化懸念を受け、外国人投資家も香港に対する投資を手控える可能性が高い。中国ハイテク大手の分社化計画が実現すればIPO市場が活性化することも考えられるが、世界的な高金利と市場心理の弱さを考慮すると、香港ドル直物相場を押し上げる程の圧力とはならないだろう。香港ドル1年物フォワードポイントは、流動性の逼迫懸念を反映し、ディスカウント800ポイント近辺で推移している。

【5月の香港ドル金利市場】

直近の香港ドル流動性減少にもかかわらず、香港ドル短期金利の上昇は限定的であり、米ドルと香港ドルの短期金利差は拡大したままである。香港ドル直物相場も引き続き7.85近辺にいる為、香港ドル短期金利が上昇する前に、アグリゲートバランスがもう一段減少する可能性はある。中国本土との往来再開は香港の成長を後押しするはずではあるものの、投資家が経済や不動産市場の見通しに対し慎重な姿勢を崩さないため、香港ドルの資金需要は盛り上がり欠けている。しかし、香港ドル流動性が徐々に逼迫していることは事実であり、香港の銀行は余剰資金の放出に慎重になり始めることが予想され、香港ドル短期金利は底を打った可能性が高いとみている。一方で、金融市場は米国FRBが2023年第4四半期に利下げ姿勢に転換することを織り込んでおり、こうした見方が強まれば、香港ドル金利の下押し圧力となることも注意が必要である。

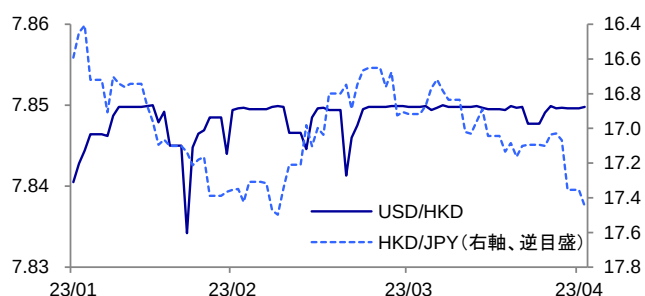
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『香港の映画事情』

2022年の香港は映画ブームの年であり、いくつかのローカル映画が香港の興行収入トップ3入りの快挙を果たしました。街でも香港映画が再び話題になっており、観ておかないと話題に入れないこともあるかもしれません。そんな中、先日開催された第41回香港電影金像奨は注目が集まりました。新しい顔ぶれや若い俳優の参加も増え、一方でベテラン俳優も未だに存在感を放っていました。特に、俳優のショーン・ラウは映画「神探大戦」で、話題の映画「スパーリング・パートナー」に出演した2人の候補者を抑えて、3度目の最優秀男優賞を獲得しました。また、大人気歌手のサミ・チェンは、映画「Lost Love」で初の最優秀女優賞を受賞し、女優としての演技力と実績が評価されています。最優秀作品賞は、「19歳の自分へ」というドキュメンタリー映画でした。この映画は、出演した少女達が自分たちの許可なく上映されたと訴えを起こした為突如上映中止となり、物議を醸していた作品です。

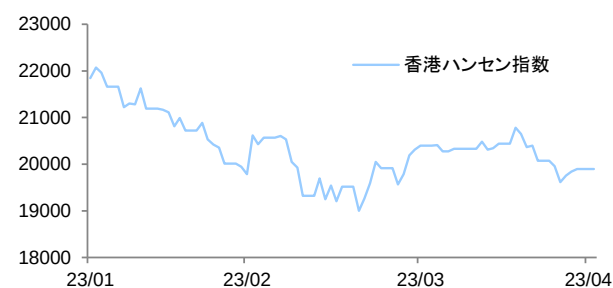
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/31	小売売上高(価額、前年比)	2月	15.0%	31.3%	6.9%
4/6	S&P Global Hong Kong PMI	3月	-	53.5	53.9
4/11	外貨準備高	3月	-	\$430.7b	\$429.1b
4/21	CPIコンボジット(前年比)	3月	1.9%	1.7%	1.7%
4/24	失業率(季調済)	3月	3.2%	3.1%	3.3%
4/25	輸出(前年比)	3月	0.1%	-1.5%	-8.8%
4/25	輸入(前年比)	3月	2.5%	-0.6%	-4.1%
4/25	貿易収支(HKD)	3月	-46.2b	-40.6b	-\$45.4b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.7000	～	6.9500
	CNY/JPY	18.00	～	20.30
	100JPY/CNY	4.9300	～	5.5500

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 竹本 寛

■ 先月の為替相場

4月のUSDCNYは小幅に上昇。

4月は6.87台でオープン。中国3月(財新)製造業PMIが事前予想を下回ると3日の寄り付き後に一時6.89台半ばまで上昇するが、材料不足で上値追いは限定的。週末に控える米雇用統計待ちで様子見姿勢が強まる中、清明節による休場も挟んで、レンジ相場が継続した。ほぼ市場予想と一致した米3月雇用統計に対してはドル高優勢の動きとなって小幅な上昇を見せたが、その後の12日の米3月CPIコア、13日の米3月PPIで減速が確認されたことでドルは弱含む展開となり、14日のオンショアオープン後に一時6.83台まで下落。しかし、すぐに水準を6.88近辺まで回復する動きを見せた。

17日、満期を迎えたMLF1年物は金利据え置きでロールオーバーされて材料視されず。18日発表の中国GDP及び主要統計が強弱入り混じる結果となる中、発表直後の為替市場は上下動したものの、値動き自体は小幅に留まり6.87台での推移が継続した。19日には実需フロー主導で6.90台まで上昇したが、翌日には下げを埋める展開となった。

その後、バイデン米大統領が対中投資抑制に関する大統領令に数週間以内に署名するとの報道もあり、中国株が軟調な動きを示す中で人民元にはやや売り圧力がかかり、25日には一時6.93台へ上伸。27日10時時点(CST)では6.93付近で推移している。

■ 今月の見通し

USDCNYは上値重い推移をメインシナリオとしたい。

5月FOMCでの25bpの利上げを既に市場が織り込む中、足もとではUSDCNYの方向感を導く明確なトピックは出ていない。バイデン米大統領の対中投資抑制の報などは、米中の距離感を一段と離す材料として、元安を想起させる一因ではあるものの、中国株の反応と比し現時点での為替相場に対する影響は大きくない。

中国内のヒト・モノの移動については既に厳しい防疫措置を講じる前の様相となっており、4月29日から中国入国時のPCR検査陰性証明の提示が不要となる等、越境移動についても日を追うごとに緩和している。3月小売売上高は前年同月比+10.6%と事前予想の+7.5%を大幅に上回るなど、ゼロコロナ政策解除後の消費にも回復の兆しが見える。加えて、GDPの3割を占める不動産セクターによりやく底打ちの兆しが見える中、公表された第1四半期GDPは前年比+4.5%と堅調な数字を示し、今年の政府成長率目標である5%の達成に向けて明るい数字を示していると言える。景気回復の持続性については今後のデータ次第ということであるが、為替相場に対しては米国のリセッションに対する警戒感も浮上してくることが想定される中で、仮に中国経済データが芳しくない数字であったとしても大きく元売りに傾斜することは想定しづらい。

米国の利上げピークアウトと利下げ時期を巡る思惑を背景としたドル売り圧力と中国景気回復を背景とした2国の対比が、USDCNYの上値を抑える要因として中期的な軟調地合いをメインシナリオとしたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の映画事情』

中国ではショッピングモール等に映画館が併設されていることも多いです。厳しいコロナ状況も緩和されたことで、映画館も賑わいを取り戻してきたようです。

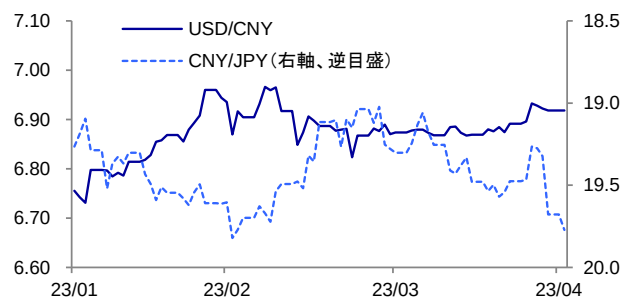
上映されているものは中国映画が一番多いですが、これは輸入映画に対して上映本数に制限をかけているためです。その内、日本の映画でいえば、やはりアニメ作品が最も多く、最近ではスラムダンクも上映開始されました。スラムダンクは中国でももちろん人気でかなりの盛り上がりを見せているようですね。

中国特有のものといえば、中国映画なのに中国語字幕が付くことでしょうか。これは方言の訛りへの対応です。広大な中国では方言によっては、もはや別の言語です。(上海に4年近くいる私ですが、上海語をほとんど理解できません……)

一方で、普通語であってにもかかわらず字幕を付けてくれるという意味では、外国人にとって中国語の勉強にはもってこいかもしれませんね。

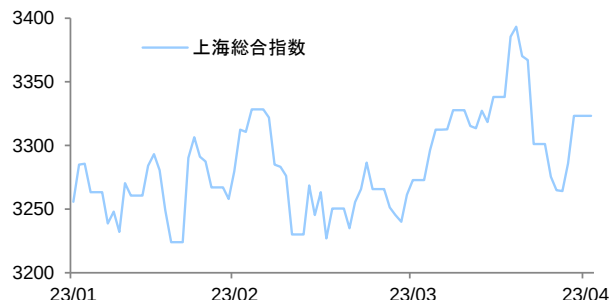
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	財新製造業PMI	3月	51.4	50.0	51.6
4/6	財新非製造業PMI	3月	55.0	57.8	55.0
4/11	CPI(前年比)	3月	1.0%	0.7%	1.0%
4/11	PPI(前年比)	3月	-2.5%	-2.5%	-1.4%
4/13	貿易収支	3月	\$40.00b	\$88.19b	\$77.29b
4/18	GDP(前年比)	1Q	4.0%	4.5%	2.9%
4/18	都市部固定資産投資(年初来/前年比)	3月	5.7%	5.1%	5.5%
4/18	小売売上高(前年比)	3月	7.5%	10.6%	-
4/18	工業生産(前年比)	3月	4.4%	3.9%	-
4/20	LPR1年物	-	3.65%	3.65%	3.65%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3000 ~ 1.3550
SGD/JPY 97.00 ~ 103.00

アジア・オセアニア資金部 森谷 友一

■ 先月の為替相場

4月のUSD/SGD相場は底堅い推移となった。

月初3日にUSD/SGDは1.33台前半で取引を開始すると2日にOPECとOPECプラスがサプライズで減産を発表し原油高、ドル高の動きが強まり1.33台半ばまで上昇も米3月ISM製造業景気指数が市場予想を下回るとドル売りが強まり1.32台後半まで下落。しかし、5日に発表された米経済指標の結果を受け景気減速懸念が高まるとリスクオフの動きが強まり新興国通貨売りの展開となると6日には1.33台を回復する展開となった。7日に発表された米3月雇用統計において良好な失業率の結果が材料視されドル買いが進み一段と上昇する展開となった。

10日から11日にかけては底堅い推移が続いたが、12日に発表された米3月CPIが市場予想を下回る結果となるとドル売りが進み1.32台まで急落。13日は米3月PPIの冴えない結果を受け一段と水準を下げると14日には一時月安値まで下落。しかし、MAS会合において金融政策の現状維持が発表されSGD売りが進む展開となり、海外時間にはウォラーFRB理事のタカ派発言を受けドル買いが強まると1.33台を回復。

17日から19日にかけては前週から続く全般的なドル買いの流れを受けて上昇基調が継続し1.33台後半まで上昇するもその後は伸び悩む展開に。20日の冴えない米経済指標の結果を受け米金利が低下すると1.33台前半まで値を下げる展開となったが下落局面は長くは続かず21日は1.33台半ばを回復した。

24日は米金利低下を受け1.33台前半まで下げるも、25日は米地銀の決算不振を受け金融システム不安が再燃しリスクオフの動きが強まり1.33台後半まで上昇する展開となった。その後は1.33台半ばを中心としたもみ合い推移が続いた。

■ 今月の見通し

今月のUSD/SGDは上値の重い推移を予想する。

先月14日、MASは金融政策の現状維持を発表。MASはこれまで臨時会合を含め5会合連続で金融引き締めを行ってきており、今会合についても市場においては金融引き締めを予想する向きも多かったものの金融引き締めの打ち止めを決定。事前に金融引き締め期待があったことに加え、会合と同じタイミングで公表された23年1～3月期実質GDP成長率の結果が前年同期比+0.1%となり前四半期(同+2.1%)から大きく減速したことで発表後はSGD売りが進む局面もあったものの一時的な動きにとどまり大きく水準を変えるほどの結果にはつながっていない。声明文において今後の世界経済の減速懸念やコアインフレが低下する見通しが示されたことを踏まえると、今後MASが再び金融引き締めに動くとの期待は市場において高まりづらい状況となったと言えそうだ。

しかし、そのような状況にも関わらずUSD/SGDの上昇圧力はさほど強まっておらず、USDサイドの要因に振られやすい展開が続いている。米国については今月4日のFOMCの結果に注目が集まる。今会合における利上げは概ね織り込まれている状況ではあるものの、その場合は今回の利上げで打ち止めになるとの見方が強まることが想定され、米金利の上昇圧力は限定的となりそう。インフレ圧力の高止まりが続くFRBによる利上げが市場の想定以上に長期化する場合とは別ではあるものの、基本的には利上げ打ち止めやその先の利下げのタイミングを探る段階に入ってきていることを踏まえるとUSD安圧力がかかりやすい展開となりそう。

上述の通りMAS会合の結果はSGD高につながる結果とはならなかったものの、FRBに対する利上げ打ち止め観測を背景としたドル安が進みやすいと考えられUSD/SGDは上値重く推移すると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の映画事情について』

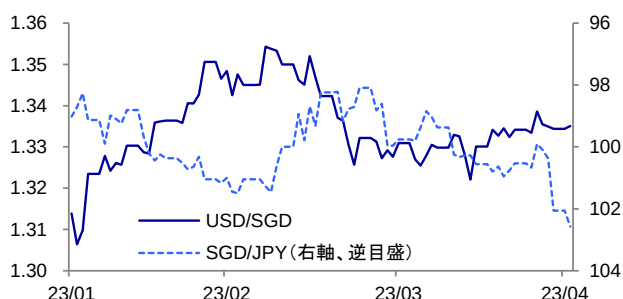
当地の映画事情ですが、主要なモールには映画館が入っていることも多く、日本と変わらず身近に映画を楽しむことができます。料金も大人の通常シートが15ドル前後(約1500円)なので、物価の割には気軽に楽しみやすいと言えるかもしれません。

日本との違いと言えば、まずは館内の温度。通常の室内でも冷房が強めで寒さを感じる人が多いですが、感覚的には映画館はその倍寒く、設定温度が20度を切っているのではないかと思うほど。上着やブランケットの持参必須です。あとは、ラグジュアリーな座席が充実している気がします。フルフラットシートに食事とドリンクもセットになったような”Gold class”という席は通常の5倍ほど。何回か映画を見に行った経験では、”Gold class”が埋まっていた記憶はあまりないのですが、2時間をラグジュアリーに過ごしたいというニーズはそれなりにあるのかもしれない。

映画のコンテンツとしては、ハリウッドの有名作品はもちろん、日本のアニメ映画がしっかりと上映されます。最近ではSLAM DUNKを見に行ってきましたが、夜遅い時間の公演ながら座席も半分以上は埋まる盛況ぶり。一般公開に先駆けたファンスクリーニングでもアニメ内のキャラクターに扮したコスプレイヤーが集結していたようです。また、数年前に公開された劇場版 名探偵コナンはシンガポールが舞台となっていたこともあり、こちらも大変盛り上がりしていました。日本コンテンツの高い人気を目の当たりにし、大変誇らしく感じます。(アジア・オセアニア資金部 吉田朋哉)

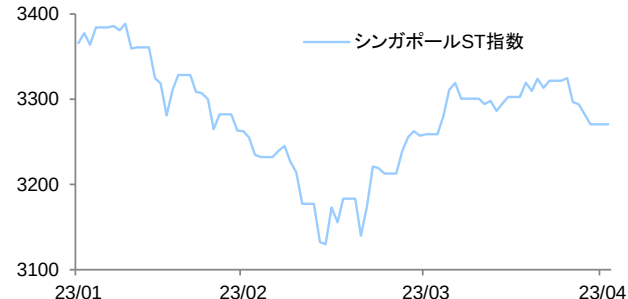
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/5	小売売上高(前年比)	2月	2.0%	12.7%	-0.8%
4/14	MAS会合				
4/14	GDP(前年比)	1Q	0.6%	0.1%	2.1%
4/17	非石油輸出(前年比)	3月	-19.4%	-8.3%	-15.8%
4/24	CPI(前年比)	3月	5.5%	5.5%	6.3%
4/26	鉱工業生産(前年比)	3月	-6.1%	-4.2%	-9.7%

タイバート相場

予想レンジ: USD/THB 33.70 ~ 34.80
THB/JPY 3.83 ~ 3.95

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 末廣 純太

■ 先月の為替相場

4月のドルバートは方向感に欠ける推移。34バート前半で取引を開始。月初、OPECプラスが予想外に原油の追加減産を発表したことで、原油価格が上昇。インフレ長期化懸念を強めることとなり、ドルバートは一時34バート前半ば付近まで上昇するも、同日に米国経済指標の軟調な結果が確認されると、一転、ドル売りが加速。ドルバートは急速に値を戻した。その後、2月JOLT求人、3月ADP雇用統計と米国労働市場に係る指標が軟調な結果であることが確認されると、イースター休暇を控えたドル売り調整が進み、ドルバートは一時33バート後半まで下落。ただ、7日に発表された米3月雇用統計は概ね予想の範囲内の結果となり、事前の米経済指標で弱い結果が続き、警戒感も相応にあった中、発表後はドル買いで反応。ドルバートは34バート前半ば付近まで値を戻した。

中旬、13日からタイはソンクラン休暇に入ったが、12日に公表された米3月CPIやFOMC議事録を受けた米金利低下を背景にドルバートは下落。ただ、14日、34バートを割り込むまで進んだドル安が一段と、同日発表の米経済指標が懸念されていたほど悪化しなかったことや、1年先の期待インフレ率が上昇したことでドルインデックスが反発。FRB高官らのタカ派発言も加わり、米金利の上昇に押されてドルはそれまでの下落を急速に取り戻し、34バート前半まで再度値を戻した。

以降、ドルバートは下旬にかけて34バート前半から半ばまでのレンジ推移が継続。強弱入り混じる米国・中国経済指標の結果や金利の発表に上下する場面を見せるも、いずれもレンジをブレイクする勢いはなく、方向感に乏しい推移となった。24日、米地銀が発表した決算において、巨額の預金流出が明らかになると、金融システム不安が再燃。アジア通貨は総じて対ドルで軟調に推移し、翌25日にかけてドルバートも34バート半ばとレンジの上限付近まで上昇するも、26日、タイ商務省が公表した貿易データにおいて、3月の輸出が前年同月比で▲4.20%となり、市場予想(同▲14.70%)対比でマイナス幅が小さかったことや、金額ベースでは12ヵ月ぶりの高水準を記録し、それに伴い貿易収支も12ヵ月ぶりの黒字を記録したことが明らかになり、バートが堅調に推移。他のアジア通貨がリスク回避的な動きから軟調な推移となる中、対照的な動きを見せ、ドルバートは34バート前半まで下落。本欄執筆時点の27日も同レベルでの推移となっている。

■ 今月の見通し

2023年に入り、中国のゼロコロナ政策撤廃による、タイ観光セクター回復期待に伴うバート高が進行した1月、そのバート高を全て吐き出した2月、米欧を震源地とする金融システム不安が台頭した3月、と比べると、4月のドルバート相場の値幅は大きなものとはなっていない。ただ、5月については重要イベントを多数控え、不安定な値動きとなることを想定している。

月初、日本ではゴールデンウィークとなる中、タイでも1日、4日、5日が休日となる。係る状況下、まずはタイ4連休の初日、バンコク時間4日1時にFOMCの結果公表が予定されている。同会合においては0.25%の利上げが予想されているが、注目はその後の動向となる。パウエルFRB議長をはじめとしたFed高官の発言に鑑みると、今のところFRBとしては年内の利下げを想定していないことが窺える。一方、マーケットは既に複数回の年内利下げを織り込んでいる。そのギャップがどのように埋まっていくのか、声明文、及びパウエル議長の会見、その後発表される経済指標で判断していくことになりそうで、動向に一喜一憂し、ドルバート相場も上下する展開が想定されよう。また、タイ中銀の金融政策決定会合(MPC)についても31日に予定されているが、前回のMPC以降、当局からは繰り返し緩やかな金融政策の正常化を進める旨が示されており、基本的には次回会合で利上げが行われ(1.75%→2.00%)、その後は主に米国の金融政策を睨みながらの舵取りが想定され得るところ。

また、14日には2019年以来となる下院総選挙が予定されている。足もとの報道や調査では、最大野党である「タイ貢献党」が優勢となっているものの、上院の議席数を勘案すると単独で政権を握るまでの勢いはないとされており、政権不安が高まれば、バートが不安定な値動きとなるリスクにも留意が必要となる。

タイ商務省が発表する3月貿易データでは輸出は改善基調にあり、貿易収支は12ヵ月ぶりに黒字に転換した。また、2023年1月から3月までにタイを訪れた外国人観光客数は約647万人となり、年間2500万人を超えるペースとなっている。中国人観光客も1月:約91千人、2月:約155千人、3月:約269千人と着実に増加してきていることはタイ経済、タイバートにとってプラスと作用しようが、上述の通り、重要イベントが控える中、5月のドルバート相場については神経質な値動きを警戒しておきたい。

■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の映画事情について』

本欄を執筆するにあたって、まだ赴任してからタイの映画館に足を運んだことのない筆者は周囲の人々に話を聞いてみた。まずは当室のタイ人スタッフ。話題になったのは料金について。「日本だと一般的な映画料金が1,900円なので、490バート前後(THB/JPY=3.9円換算)かな」と答えると、「それは高い」と一言。タイの映画料金は映画館や曜日等、条件によって異なるものの、およそ300バート前後で、さらに頻繁にプロモーションも行われているため、大体はもっと安く見られるとのこと。

そして、続いて話を聞いたタイ駐在歴の長い日本人駐在員によれば、タイでの映画鑑賞はタイ観光の穴場としてオススメ、とのこと。

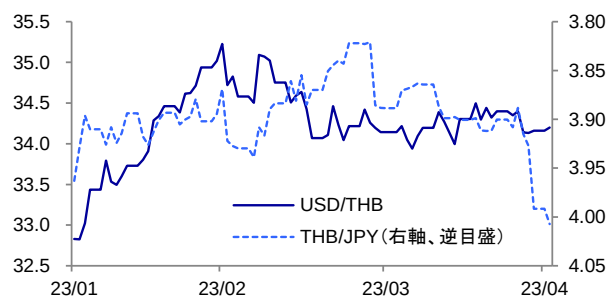
- ・料金は高くなってしまいうものの、ゆったりとラグジュアリーな環境で映画を見ることができるVIPシートの存在
- ・冒頭の予告と本編の間には国王賛歌が流れ、その間はたとえ外国人であろうとも起立をして耳を傾ける
- ・長袖が必須と言われる程ガンガンに効いた冷房

などなど、“タイならでは”を感じることができる機会が多いのだという。

話題になった日本の作品の多くはタイでも公開され、日本語音声・タイ語字幕で見ることができるので、日本人も安心ではあるものの、作品の上映サイクルは非常に短く、知らない間に上映が始まり、知らない間に終わっているという事態も多くあるようだ。タイでの映画鑑賞を検討される際には注意願いたい。

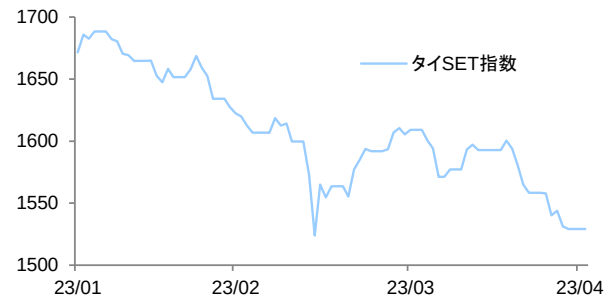
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/5	CPI YoY	3月	3.25%	2.83%	3.79%
4/5	CPI コア YoY	3月	1.80%	1.75%	1.93%
4/11	消費者信頼感指数	3月	-	48.0	46.8
4/25	自動車販売台数	3月	-	79,943	71,551
4/26	輸出(通関ベース)YoY	3月	-14.70%	-4.20%	-4.74%
4/26	輸入(通関ベース)YoY	3月	-4.53%	-7.10%	1.10%
4/26	貿易収支(通関ベース)	3月	-\$1,000M	\$2,719M	-\$1,113M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.40	～	4.52
	MYR/JPY	29.41	～	30.30
	JPY/MYR	3.30	～	3.40

マレーシアみずほ銀行 内田 壘

■ 先月の為替相場

先月のリングギット相場は、ハリヤ連休前後の薄商いの中、MYR売りに押される形で月後半を中心に軟調な展開となった。

上旬は軟調な米雇用指標や原油高を背景に堅調。OPECプラスによる予想外の追加減産報道で北海ブレントが86ドル台まで急騰した他、米2月のJOLT求人件数が約2年ぶりに1000万件を割り込む低水準。また5日の米3月ADP雇用統計でも市場予想を下回る結果となったことで、7日発表予定の米3月雇用統計に対する警戒感が広がる中、ドル売りが進展。USD/MYRは一時4.40割れ水準まで下げた。3月米雇用統計が堅調だったことで来月FOMC利上げが意識された。

ところが中旬に入ると12日米3月CPIが発表され、サービス価格が依然下げ止まりを示しつつエネルギー価格下落が牽引役となり前年比+5.0%まで鈍化。また、13日米PPIでは前月比▲0.5%と20年4月以来の下げを記録した他、新規失業保険申請件数が軟調。市場では一転して5、6月FOMCで利上げ停止を正当化する重要なデータとなる可能性が意識され、ドル安リング高となりUSD/MYRは一時4.38台まで下落した。

下旬に入ると、ハリヤ連休前後で市場参加者が少ない薄商いの中、MYRは売り優勢の展開。米ウォラーFRB理事によるタカ派発言や4月シガン大学消費者信頼感の強い結果を受け、17日は月曜日からMYR軟調推移。18日に中国第一四半期GDPがゼロコロナ政策終了の影響で上振れしたが、MYR安の流れに逆らえず反応は限定的。更に19日の3月貿易統計が前年比マイナス成長となり、輸入は市場予想も下回ったことでMYR売り優勢の展開でハリヤ連休に突入した。連休明け25日には米地銀決算発表で1-3月の顧客預金流出が明らかになり、保有債券の資産売却を検討中と伝わると、銀行危機の再燃を懸念したリスク回避のドル買いとなりUSD/MYRは一時4.46近辺まで上昇。連休後もMYR安の流れは止まらず月末を迎えた。

■ 今月の見通し

今月のUSD/MYRは、一旦沈静化したと見られていた銀行危機に対する市場の警戒感が先月下旬の米地銀の決算発表を皮切りに再び熾り始める中、上値方向への警戒を抱えながらの相場展開となるとなる。

今月は3日にBNM政策会合、4日に米FOMCが控える。3日会合では直近の3月CPIで国内物価動向が中銀想定内で推移していることが確認されている状況下、金利据え置きが市場コンセンサスとなっている。特に直近発表された貿易統計で輸出入の前年同期比がマイナス圏へ落ち込んだ状況下でBNMが金利引き上げを断行すればMYR為替相場へのインパクトは相応になると見る。また、4日FOMCでは25bpの利上げが市場ではメインシナリオだが、足元で銀行危機への警戒感が高まる状況下、パウエル議長が利上げに踏み切るべきかどうかは難しい判断となる。

貿易統計ではやや先行き不安感が煽る国内経済である一方、先月ムーディーズがマレーシアのソブリン格付けを維持し、見通しも安定的に据え置きと発表している。発表時ステートメントでは、マレーシア国内の安定的な資金調達環境がマレーシアの信用力を引き続き支援するとした。また、財務省も即日でムーディーズの発表を歓迎するプレスを発表しており、政府が外部格付機関を強く意識する姿勢が改めて確認された。今後も政府主導で海外投資家を重視する姿勢も各種報道で確認されており、今後のマレーシア経済成長にとってキープファクターとなる。

以上、グローバルな金融市場の不安が熾り続ける中、USD/MYRの上値方向の警戒感は拭えない状況だが、6月FOMC以降はドル利下げを織り込む環境下、銀行危機の再燃が現実化しない限り、地合としては金利差縮小観測によるMYR買い方向へ意識が向きやすい相場展開と見ている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の映画事情について』

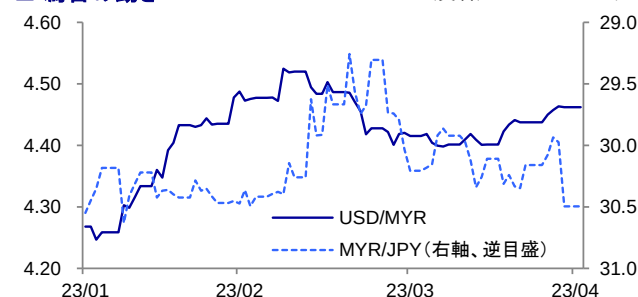
今年3月アカデミー賞で最優秀作品賞を獲得したEverything Everywhere All At Onceに主演女優として出演したミッシェル・ヨーさんはマレーシア人です。美食の街として知られるマレーシア第三の都市イポー出身であり、細身の体格でハードなアクションをこなす彼女のボディーが、あのきれいな水で育った塩チキンとイポーもやしでできていると知り、もう一度イポーへ足へ運びたいくなりました。

中国系マレーシア人として華僑の両親の間に生まれた彼女ですが、幼少期からバレエを習い、ダンスが得意だった様です。ちなみに私が住んでいる街にも有名なバレエ教室があり、将来のミッシェル・ヨーさんを目指し、日々特訓に励んでいると聞きます。中国系マレー人は勿論、欧米系に加え日本人の子供たちも習っている様子。我が息子たちは隣にあるペットショップで売られているハムスターが回し車を走っている姿に釘付けなので、ハムスターがバレエをしない限り彼らの関心事項にはならなさそうです。

さて、他民族の国マレーシアでは様々な国の映画が上映されるので使用言語もバラエティに富んでいます。当然ながら字幕もマレー語に中国語などと2言語は当たり前。スクリーン上の相応な面積が文字で遮られるので、慣れるまではやや気になります。日本語映画だと3言語になるのでしょうか。今度、日本映画の上映機会に出会えたら、チェックしてみたいと思います。

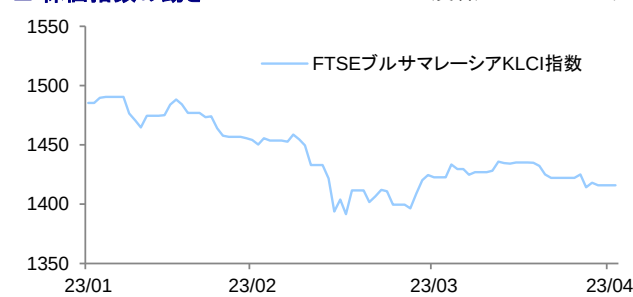
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	S&P Global PMI	Mar		48.8	48.4
4/7	Foreign Reserves	Mar 3		\$115.5B	\$114.0B
4/11	Industrial Production YoY	Feb	2.5%	3.6%	1.8%
4/19	Imports	Mar	2.2%	-1.8%	12.4%
4/19	Trade Balance MYR	Mar	20.60B	26.69B	19.56B
4/19	Exports	Mar	-1.9%	-1.4%	9.8%
4/20	CPI YoY	Mar	3.6%	3.4%	3.7%
4/25	Foreign Reserves	Apr 14		\$115.9B	\$115.5B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14500 ~ 15100
 IDR/JPY 0.8800 ~ 0.9450
 JPY/IDR 106.00 ~ 112.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 綱島 正侑記

■ 先月の為替相場

4月のルピアは上昇。

月初3日、15000近辺で取引を開始したドルルピアは、リスクセンチメントが改善しアジア通貨が買い戻される動きを受けルピアは堅調に推移。3日に発表されたインドネシア3月CPIの結果は前年比+4.97%となり、事前予想+5.12%を下回る内容となったが、インドネシア中銀は既に利上げを停止している中においては市場の反応は限定的となり14900台後半で推移。4日以降もルピアは堅調に推移し一時14800台後半まで上昇となったが、同水準ではドルを買い戻す動きも見られ14900台半ばまでルピアは反落。翌週10日、14900近辺で取引を開始したドルルピアは14900近辺の狭いレンジ内で方向感に欠ける展開。

12日海外時間に米3月CPIの発表を控える中、11、12日も14800台後半で様子見ムードとなり、狭いレンジ内での値動き。12日海外時間に発表された注目の米CPIの結果はほぼ予想の範囲内となったが引き続きインフレの鈍化傾向が確認されたことに加え、その後に発表された3月FOMCの議事要旨がハト派と捉えられたことを受けてドル売りが優勢となると、翌13日アジア時間のルピアは対ドルで上昇し14700台前半まで上昇幅を拡大。14日もドル売りが優勢な中ドルルピアは14600台半ばまでルピア高が進展し昨年8月来の高値を付け越えとなったが、週明け17日以降はドルを買い戻す動きが優勢となり18日にかけて14800台半ばまで値を戻した。18日、インドネシア中銀政策決定会合が開催され、事前予想通りの政策金利据え置きが決定されたが反応は限定的。会合後のベリー中銀総裁会見においては前会合に引き続き年内にインフレ率がインフレ目標である2-4%のレンジまで低下するとの見方が示された他、欧米の金融不安は後退しつつあり過度なリスクオフにはならないとの見方が示された。20日～25日まで連休となったが、連休明けとなる26日、ルピアは14800台後半で取引を開始。一時14900台を付ける局面も見られたが引けにかけてはルピアは反落、翌27日にかけて14600台後半までルピア高が進展となった。

■ 今月の見通し

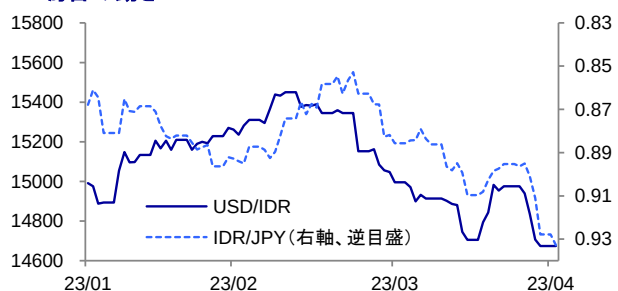
4月のルピアは対ドルで軟調な値動きを予想。

欧米に端を発する金融機関への不安は後退し、リスクセンチメント悪化を受けた新興国からの資金流出も収束したやに見受けられる一方で、米景気指標へ目を向ければ決して景気再加速が期待できる状態には無く楽観はできないと考える。4月後半にかけて米地銀の預金流出に注目が集まりリスク回避的な値動きとなった局面も見られたが今後、同様の値動きは想定されよう。米金融機関への懸念が高まり、リスク回避的な値動きとなれば市場はドル安で反応することは考えられるものの、同時に新興国からの資金流出も想定され新興国通貨安で市場が反応することを想定しておくべきであろう。インドネシアも現状では自動車生産台数が前年を上回るペースを維持しており引き続き国内経済は堅調と見られるが、一方で貿易収支は石炭価格の下落の影響もあり黒字幅は減少傾向にある。2022年通年で貿易黒字が過去最大となったことは、経常収支の黒字化へ寄与しルピアをサポートする一因となっていたが、貿易黒字が縮小しつつあることは翻ってルピア安要因として作用するのではなかろうか。

5月3日にはFOMC会合が予定され、本稿執筆時点では0.25%の利上げが見込まれている状況ではあるが、インフレ率が鈍化しつつある中で6月会合以降では金利を据え置くことを予想する。多数派ではないものの一部6月会合での利上げも見込む向きもあり、6月利上げ織込みが剥落する過程では一時的にドル安・ルピア高となる局面は想定されるものの一巡後はルピア安へ回歸するものとする。

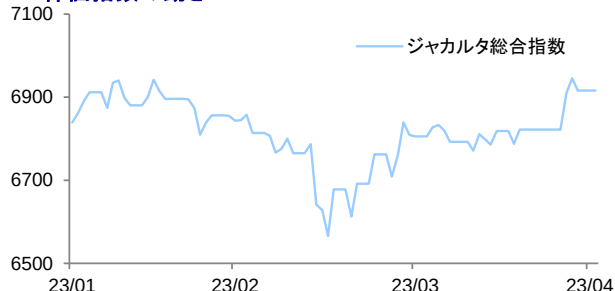
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/3	CPI (前年同月比)	3月	5.12%	4.97%	5.47%
4/17	貿易収支 (USD M)	3月	4,250	2,910	5,460
4/17	輸出 (前年比)	3月	-14.05%	-11.33%	4.51%
4/17	輸入 (前年比)	3月	-13.50%	-6.26%	-4.32%
4/18	BI 7daysリバースレポ金利	-	5.75%	5.75%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 54.50 ~ 57.50
JPY/PHP 0.41 ~ 0.43

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 榎 雄一郎

■ 先月の為替相場

フィリピンの3月の消費者物価指数は前年同月比+7.6%と前月の+8.6%から鈍化し、昨年9月以来の水準となり、インフレ鈍化傾向継続が示されたほか、2月の貿易収支では輸出減少が継続も予想外に輸入が減少したことを受けて赤字幅が縮小となった一方で、OPECプラスが想定外に協調減産を発表し、原油先物価格の急伸から、インフレ懸念が台頭したほか、堅調な米雇用統計の結果を受けた、米追加利上げ観測の高まりから、ドルが広範囲に上昇し、ペソは軟調地合いとなった。また、フィリピン中銀のメダラ総裁は4月のインフレが低下基調を維持した場合の5月の次回会合での利上げ停止の可能性を示唆したほか、今年11月までにインフレは目標上限の4%を下回るとの見通しに自信を示したこと、利上げ停止観測が高まり、ペソは一段安となり、月半ばにかけて、1米ドル=55ペソ台まで下落する展開となった。

米当局者のタカ派発言や米インフレ期待が上昇したことを受け、ドル上昇地合い継続となったほか、メダラ総裁は4月の消費者物価指数が低下基調を維持すれば、5月会合での利上げ停止とその後の据え置きを検討するとの考えを改めて示したことや2月のフィリピン海外在留労働者からの送金額が25.7億ドルと前月の27.6億ドルから減少し、前年同月比で予想を下回る増加に留まったことからペソは17日に大幅下落となり、年初来安値に迫った。その後も堅調な米経済指標を受けた、年内の米利下げ織り込み観測の後退や金融セクターへの懸念が沈静化を見せ、インフレ抑制に焦点が戻るなか、米金融当局者らのタカ派発言を受けて、ドル上昇地合い継続となり、ペソは節目の1米ドル=56ペソも割り込み、19日には年初来安値を更新し、約4か月ぶりの安値まで水準を切り下げた。

下旬に入り、フィリピン政府が今年の成長率は6%-7%を維持し、2028年にかけて6.5%-8%の高成長が続くとの見通しを示したことを好感したほか、フィリピン中銀高官が中期的にペソは安定的に推移するだろうと発言したことを受けて、当局による介入の思惑からペソは反発し、1米ドル=55ペソ台半ばまで値を戻す展開となったが、月間ベースでは下落となった。

■ 今月の見通し

米景気減速懸念や金融不安再燃リスクを踏まえると、米利上げ余地は限定的であるが、インフレが利下げを開始できるほどの水準まで下がるには時間が掛かると見られ、当面は現行水準での据え置き、或いはもう1回程度の利上げが想定される。

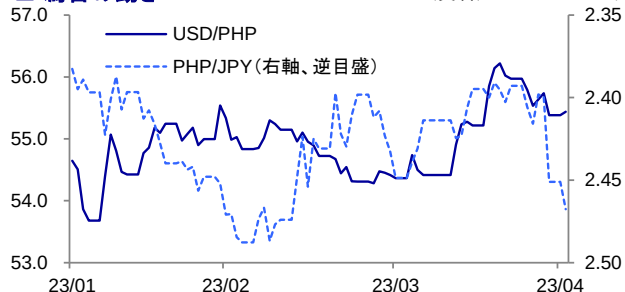
一方、短期金利市場では年末にかけての米利下げが織り込まれ、米金融当局者達の予測とは乖離がある状況であり、短期金利の更なる低下余地は限定的と考えるとドルは方向感に欠ける展開となる公算が高い。但し、FRB高官らからはインフレ圧力の根強さから相当期間の政策金利据え置きや更なる利上げを支持する発言も相次いでおり、金融不安が鎮静化を見せる中、市場の織り込みが修正される過程でドル上昇圧力が高まる可能性は引き続き残るだろう。

フィリピン中銀メダラ総裁は4月の消費者物価指数が前月比で0.3%以上低下した場合、次回5月会合での利上げ停止を示唆し、これまで5月会合での利上げは時期尚早との見解を示していたが、インフレ低下の見通しに自信を示す中、タカ派スタンスに後退が見られるほか、フィリピンの貿易赤字は依然として高水準で推移していることから、ペソが売られやすい環境となろう。

金融セクターの混乱は一旦の鎮静化を見せているが、今後も懸念は燻っているほか、年後半の米リセッションの可能が高まっている中、その影響が世界的に波及した場合はリスクオフからアジア通貨が急落する可能性にも留意したい。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 81.50 ~ 83.50
INR/JPY 1.58 ~ 1.68

アジア・オセアニア資金部 インド室 綿引 修平

■ 先月の為替相場

【4月の米ドル/インドルピーは上下レンジ内での推移が継続】

82台半ば近辺で当月取引を開始。月初は、じりじりとルピー高が進行するも、6日に実施された4月の金融政策委員会では、2022年5月の利上げ開始から6会合ぶりに、政策金利を6.50%の据え置きを全会一致で決定(市場予想は6.75%(+0.25%の利上げ))したことで、ルピー安に転じる展開。その後、7日に発表された米3月雇用統計が市場予想通りの結果となったことを受け、米景気への過度な警戒感が緩んだことで、ドル高圧力の台頭からルピー安圧力に拍車をかける流れとなった。注目されている米3月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回る結果に、米金利低下の流れから再びドル安ルピー高が進行したものの、81台後半水準においては、インド中銀からのドル買い為替介入の動きが継続しており、底打ち感を見せる。その後は、外部要因(冴えない米経済指標、FRB高官のタカ派発言、日銀総裁の緩和姿勢継続等)を睨みながらの格好となるも、総じて上下狭いレンジ内でのみ合いに終始し、結局82台を割り込む水準にてクローズ(25日時点)。

インド経済指標では、12日に発表された3月CPI(前年比)は、前月+6.44%から、+5.66%まで低下し、インド中銀の金融政策目標である+4.0%±2%の範囲内に2か月ぶりに収まるも、引き続き+4.0%水準の上方に位置している状況は不変。

■ 今月の見通し

【5月の米ドル/インドルピーは83水準を上限に方向感に乏しい展開を想定】

4月においても、インド中銀からの為替介入の動きは継続しており、過度なルピー高・ルピー安を抑制する動きから、目先は81~83のレンジ内での推移を想定する。

4月の金融政策委員会では、市場予想に反して政策金利の据え置きとなった。一方、政策スタンスとしては前回会合からの文言を維持(引き続き利上げ姿勢)しており、インド中銀総裁からも「今回決定は一時停止であり、方向転換ではない。インフレ動向との戦いを継続する」との発言がなされている状況。加えて、CPIについては、前月対比で低下した結果となり、来月発表分についても、前年同月対比(2022年4月CPIは、+7.8%)で低下する予想であるものの、引き続きインド中銀の金融政策目標である+4.0%から上方シフトは変わらない様相の中で、次回からの会合(6月あるいは8月)にて、再度の利上げに踏み切る可能性は十分ある点につき、注意しておく必要があると考える。

OPECプラスの減産発表に伴う原油高圧力により、ルピー相場にはネガティブ(通貨安)な材料。一方、5月初には米FOMCが予定されており、本会合では利上げ継続が市場予測なものの、米CPIの低下や発表されている米経済指標が芳しくない状況下、中長期的には利下げ局面へ向かう流れの中で、ドル安/新興国通貨高の圧力が台頭化する局面が訪れることへの警戒感も拭えない。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の映画事情について』

インド映画との出会いは「踊るマハラジャ」からだ。筋立てがよくわからず踊ってばかりのインド映画に興味はわかず、せいぜい「バーフバリ」を観た位で、在宅勤務もあって映画の様子が全くわからない。ので、周りに聞いてみた。

「RRR」という日本でもヒットした映画が面白いという。インド独立を2人の若者の立場から描き、かつインド神話も思い起こさせる設定でインド人は勿論観た人が引き込まれる内容だとか。ダンスも当然あるそうで、動画で観たがなるほどキレッキレであった。

乏しいインド映画経験しかないのを見当違いのことを言っていたら申し訳ないが、「踊るマハラジャ」「バーフバリ」「RRR(動画で部分的に視聴)」を通して感じたのは荒唐無稽からリアルに変化していったのかなという印象だった。

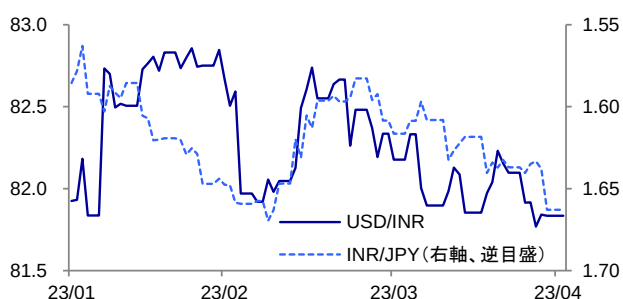
「マハラジャ」は一緒にいた友人が訳が分からなすぎて気分が悪くなったほどだったが、「RRR」は歴史あり友情と恋あり、ダンスも勿論あり、筋肉は残念ながら控えめだがスーツ姿で踊る姿は現代に近い時間軸を感じさせる。導入部の構成も素晴らしく、引き込まれて3時間があっという間。小さなお子様も画面にくぎ付けというものであるらしい。

インド映画は今後も変化し変化せず人の関心と興味を引き続けるのでは感じるに十分な周囲の話であった。遅ればせながら全編観となりました。

バンガロール支店 近藤

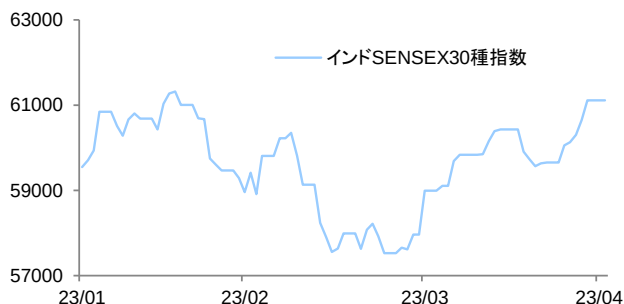
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
4/3	製造業PMI
4/6	政策金利
4/12	CPI
4/12	鉱工業生産

(資料) ブルームバーク

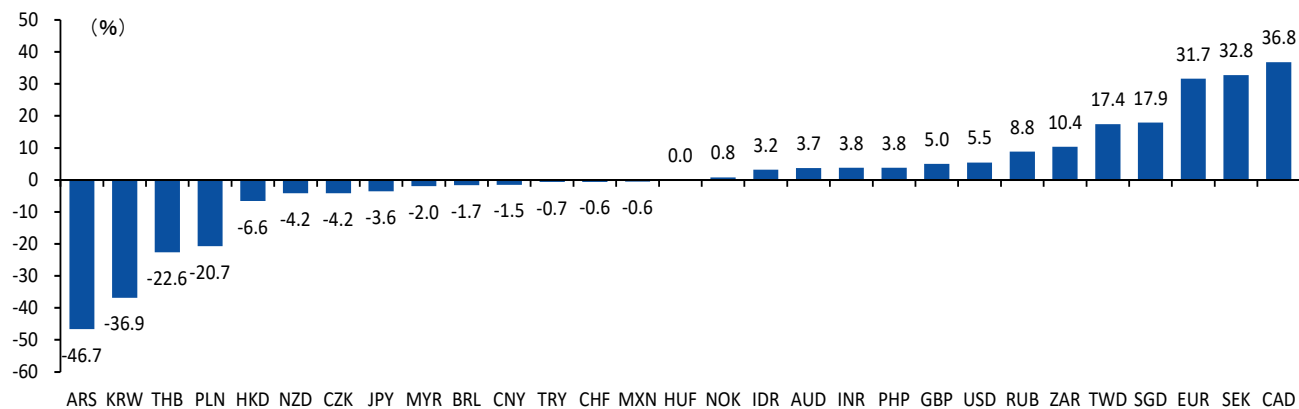
期間	予想	結果	前回
3月	-	56.4	55.3
4月	6.75%	6.50%	6.50%
3月	5.70%	5.66%	6.44%
2月	5.00%	5.60%	5.50%

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2022年末	2023年4月末	騰落率	株式市場	2022年末	2023年4月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	33147.25	34098.16	2.9%	-
日本	USD/JPY	131.12	136.3	4.0%	日経平均株価	26094.5	28856.44	10.6%	6.4%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0705	1.1019	2.9%	ドイツDAX指数	13923.59	15922.38	14.4%	14.4%
英国	GBP/USD	1.2083	1.2567	4.0%	ロンドンFTSE100指数	7451.74	7870.57	5.6%	1.6%
豪州	AUD/USD	0.6813	0.6615	-2.9%	S&P/ASX200指数	7038.688	7309.152	3.8%	7.0%
カナダ	USD/CAD	1.3554	1.3552	0.0%	S&PTロント総合指数	19384.92	20636.54	6.5%	6.5%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.8986	6.9184	0.3%	上海総合	3089.258	3323.275	7.6%	7.3%
香港	USD/HKD	7.8016	7.8496	0.6%	香港ハンセン	19781.41	19894.57	0.6%	0.0%
インド	USD/INR	82.735	81.8338	-1.1%	インドSENSEX30種	60840.74	61112.44	0.4%	1.6%
インドネシア	USD/IDR	15573	14674	-5.8%	ジャカルタ総合	6850.619	6915.716	1.0%	7.1%
韓国	USD/KRW	1260.33	1339.03	6.2%	韓国総合株価	2236.4	2501.53	11.9%	5.3%
マレーシア	USD/MYR	4.4045	4.4622	1.3%	ブルサマレーシアKLCI	1495.49	1415.95	-5.3%	-6.5%
フィリピン	USD/PHP	55.741	55.384	-0.6%	フィリピン総合	6566.39	6625.08	0.9%	1.5%
シンガポール	USD/SGD	1.3395	1.3344	-0.4%	シンガポールST	3251.32	3270.51	0.6%	1.0%
台湾	USD/TWD	30.73	30.752	0.1%	台湾加権	14137.69	15579.18	10.2%	10.1%
タイ	USD/THB	34.608	34.159	-1.3%	タイSET	1668.66	1529.12	-8.4%	-7.2%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2023年4月時点)



■ 実質GDP成長率

	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2023Q1	2021	2022
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.7	7.0	-1.6	-0.6	3.2	2.6	1.1	5.9	2.1
日本*	-1.4	4.5	-1.8	4.7	-1.1	0.1		2.3	1.0
ユーロ圏	4.0	4.8	5.5	4.4	2.5	1.8	1.3	5.3	3.5
英国	8.5	8.9	10.6	3.8	2.0	0.6		7.6	4.1
豪州	4.1	4.6	3.0	3.1	5.9	2.7		5.3	3.7
カナダ*	5.9	6.9	2.4	3.6	2.3	0.0		5.2	3.4
エマージングアジア									
中国	5.2	4.3	4.8	0.4	3.9	2.9	4.5	8.4	3.0
香港	5.5	4.7	-3.9	-1.2	-4.6	-4.2		6.4	-3.5
インド	9.1	5.2	4.0	13.2	6.3			6.5	9.1
インドネシア	3.5	5.0	5.0	5.5	5.7	5.0		3.7	5.3
韓国	4.0	4.2	3.0	2.9	3.1	1.3	0.8	4.1	2.6
マレーシア	-4.5	3.6	5.0	8.9	14.2	7.0		3.1	8.7
フィリピン	7.0	7.9	8.0	7.5	7.7	7.1		5.7	7.6
シンガポール	8.7	6.6	4.0	4.5	4.0	2.1	0.1	9.1	3.7
台湾	4.1	5.2	3.9	3.0	3.6	-0.4	-3.0	6.5	2.5
タイ	-0.2	2.0	2.2	2.5	4.6	1.4		1.6	2.6

(注) インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	23/02	23/03	2021	2022
	(%)								(%)	
先進国										
米国	3.7	3.5	3.7	3.6	3.5	3.4	3.6	3.5	5.4	3.6
日本	2.5	2.6	2.6	2.5	2.5	2.4	2.6	2.8	2.8	2.6
ユーロ圏	6.7	6.7	6.7	6.7	6.7	6.6	6.6		7.7	6.7
英国	3.5	3.6	3.7	3.7	3.7	3.7	3.8		4.6	3.7
豪州	3.5	3.6	3.4	3.5	3.5	3.7	3.5	3.5	5.1	3.7
カナダ	5.3	5.2	5.2	5.1	5.0	5.0	5.0	5.0	7.5	5.3
エマージングアジア										
中国									3.9	
香港	4.1	3.9	3.8	3.7	3.5	3.4	3.3	3.1	5.4	4.3
インドネシア	5.9								6.4	5.9
韓国	2.6	2.8	2.8	2.8	3.1	2.9	2.6	2.7	3.6	2.9
マレーシア	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.5		4.6	3.8
フィリピン	5.3	5.0	4.5	4.2	4.3	4.8	4.8		7.8	5.4
シンガポール	2	2.1	2.0	2	2	1.9	1.9	1.8	2.7	2.1
台湾	3.7	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	4.0	3.7
タイ			1.2			1.2				

(資料) ブルームバーグ、Macrobond、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	22/07	22/08	22/09	22/10	22/11	22/12	23/01	23/02	23/03	2021	2022
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	8.5	8.3	8.2	7.7	7.1	6.5	6.4	6.0	5.0	4.7	8.0
日本	2.6	3.0	3.0	3.7	3.8	4.0	4.3	3.3	3.2	-0.3	2.5
ユーロ圏	8.9	9.1	9.9	10.6	10.1	9.2	8.6	8.5	6.9	2.6	8.4
英国	10.1	9.9	10.1	11.1	10.7	10.5	10.1	10.4	10.1	2.7	9.1
豪州			7.3			7.8			7.0	2.9	6.6
カナダ	7.6	7.0	6.9	6.9	6.8	6.3	6.3	5.9	5.2	3.4	6.8
エマージングアジア											
中国	2.7	2.5	2.8	2.1	1.6	1.8	2.1	1.0	0.7	0.9	2.0
香港	1.9	1.9	4.4	1.8	1.8	2.0	2.4	1.7	1.7	1.6	1.9
インド	6.7	7.0	7.4	6.8	5.9	5.7	6.5	6.4	5.7	5.1	6.7
インドネシア	4.9	4.7	6.0	5.7	5.4	5.5	5.3	5.5	5.0	1.6	4.2
韓国	6.3	5.7	5.6	5.7	5.0	5.0	5.2	4.8	4.2	2.5	5.1
マレーシア	4.4	4.7	4.5	4.0	4.0	3.8	3.7	3.7	3.4	2.5	3.4
フィリピン	6.4	6.3	6.9	7.7	8.0	8.1	8.7	8.6	7.6	3.9	5.8
シンガポール	7.0	7.5	7.5	6.7	6.7	6.5	6.6	6.3	5.5	2.3	6.1
台湾	3.4	2.7	2.8	2.7	2.4	2.7	3.1	2.4	2.4	2.0	3.0
タイ	7.6	7.9	6.4	6.0	5.6	5.9	5.0	3.8	2.8	1.2	6.1

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2021Q2	2021Q3	2021Q4	2022Q1	2022Q2	2022Q3	2022Q4	2021	2022
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-3.3	-3.4	-3.5	-3.8	-3.8	-3.7	-3.6	-3.6	-3.7
日本	3.9	4.2	3.9	3.7	3.1	2.4	2.1	3.9	2.1
ユーロ圏	2.7	2.8	2.3	1.6	0.6	-0.7	-0.7	2.3	-0.7
英国	-2.9	-3.0	-1.5	-3.2	-4.2	-3.8	-3.8	-1.5	
豪州	3.0	3.5	3.1	2.3	2.0	1.0	1.2	3.1	1.2
カナダ	-1.0	-0.6	-0.3	-0.2	0.2	0.0	-0.4	-0.3	-0.4
エマージングアジア									
中国	2.0	2.0	2.0	2.0	2.1	2.4	2.4	2.0	2.2
香港	10.2	10.0	11.8	12.6	10.9	11.6	10.7	11.8	10.7
インド	0.4	-0.5	-1.1	-1.2	-1.9	-2.6	-2.4	-1.1	-2.4
インドネシア	-0.1	0.3	0.3	0.4	0.9	0.8	1.1	0.3	1.0
韓国	5.5	5.6	4.9	4.7	4.1	2.9	1.9	4.7	1.8
マレーシア	4.8	3.8	3.5	2.8	2.1	2.1	2.6	3.5	2.6
フィリピン	1.8	0.3	-1.8	-2.8	-4.6	-5.9	-4.6	-1.8	-4.4
シンガポール	16.7	17.0	18.0	19.8	20.1	20.3	19.3	18.0	19.3
台湾	15.5	14.9	15.1	15.5	14.9	14.3	13.5	15.1	13.5
タイ	0.8	-1.7	-2.1	-2.3	-3.4	-4.0	-3.5	-2.1	

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	4.75-5.00	引き締め: 2022/3/16	0.00-0.25	2023/2/1	+25bp	2023/3/20	+25bp
日本	当座預金残高の政策金利	-0.10	緩和: 2008/10/30	0.30	2016/1/29	-20bp	2023/4/28	現状維持
ユーロ圏	預金ファシリティレート	3.00	引き締め: 2022/7/21	-0.50	2023/3/16	+50bp	2023/3/16	+50bp
英国	バンク・レート	4.25	引き締め: 2021/12/16	0.10	2023/3/23	+25bp	2023/3/23	+25bp
豪州	キャッシュ・レート	3.60	引き締め: 2022/5/3	0.10	2023/3/7	+25bp	2023/4/4	現状維持
カナダ	翌日物金利	4.50	引き締め: 2022/3/2	0.25	2023/1/25	+25bp	2023/4/12	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物最優遇貸出金利(LPR)	3.65	緩和: 2012/6/8	6.31	2022/8/22	-5bp	2023/4/20	現状維持
インド	翌日物レポ金利	6.75	引き締め: 2022/5/4	4.00	2023/4/6	+25bp	2023/4/6	+25bp
インドネシア	7日物リバースレポレート	5.75	引き締め: 2022/8/23	3.50	2023/1/19	+25bp	2023/4/18	現状維持
韓国	7日物レポ金利	3.50	引き締め: 2021/8/26	0.50	2023/1/13	+25bp	2023/4/11	現状維持
マレーシア	翌日物金利	2.75	引き締め: 2022/5/11	1.75	2022/11/3	+25bp	2023/3/9	現状維持
フィリピン	翌日物金利	6.25	引き締め: 2022/5/19	2.00	2023/3/23	+25bp	2023/3/23	+25bp
台湾	再割引金利(公定歩合)	1.875	引き締め: 2022/3/17	1.125	2023/3/23	+12.5bp	2023/3/23	+12.5bp
タイ	翌日物レポ金利	1.75	引き締め: 2022/8/10	0.50	2023/3/29	+25bp	2023/3/29	+25bp
ベトナム	リファイナンス金利	6.00	引き締め: 2022/9/22	4.00	2022/10/25	+100bp	2022/10/25	+100bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行